

「看護手看護手」

「何ですか」

「眼は如何したらう、眼は助からぬか」

「イヤモウ目玉は飛出して仕舞つて居ます」

と申しましても幾らか精神に異状が御座いますか少しも看護手の言葉を信用致しませうに。

「眼が見へない眼が見へない、眼は如何したらう眼は助かるたらうか」  
と云ひ續けて居ます、小笠原兵曹が此重傷を負ひますと同時に、消防の水に不足を生じて詣つたので、観劇堂の火を消し留める事が出来ませぬ、仕方が御座いませんから、其側の小さい建築物を壊して、漸く鎮火致しましたが、此際支那教民を指揮して居ました義勇兵の杉幾太郎君は、煉瓦の破片で右の腕に擦過銃創を負ひ、支那教民も二人は即死

七人は負傷致します、二等水兵の間瀬淺次郎君も前額に負傷致しました、間瀬君は始めから「負傷で休めば戦さが出来ぬ」と云ふ元氣ですから、此時の負傷も充分休業の價値はあるのでしたが、綑帯が濟むと其儘鐵砲を持つて、サツサと歩哨線に走つて往つて仕舞ひました、斯う云ふ元氣な男ですから籠城中に前後七回の負傷を受けて、負傷の間屋になつたのです。

三三三

滑稽の教民煉瓦二三枚を負ふて這出し

元氣の間瀬水兵傷の上に傷を重ねる事

観劇堂の火事は如何か斯うか消し留めましたが、十一時頃から敵は又例の野砲を打ち出して、今度は遠方から最大距離で打つものですか、親王府の内に避難して居る、三千餘人の教民の中で、一人の炊事



隊の老人が、煮焚を爲る鍋の数が少ないものですから、モウ此頃から晝飯を焚きにかゝつて居ますと、何處から來たか野砲の彈丸が、イキなり鍋の中に飛込みましたから、鍋は破れる中の粥は四方へ散る、飯焚の老人は腰を抜かして仕舞ひました。

斯う云ふ風に陣地を遠方に換へました敵の砲丸は最初五六發親王府内で大屋と云つて居る、大きな建築物の家根に許り當つて居ましたが、後には其壁に中り、終には壁の側に築き上げた銃眼に命中致す様になりました、此時大屋の應接間の近所に造つた銃眼に、義勇兵の川上季三君と、二等水兵の河内三吉君とが、中に敵民隊の支那人を挿んで歩哨に就て居ますと、一發の敵彈がピユーツと唸つて、高く七八尺も積上げてあります、煉瓦の墻壁の、下から一間許りの所に命中致しますと同時に、煉瓦の墻壁が半圓形に壞れまして、其煉瓦がグララ／＼と

と歩哨に立つた三人の頭の上に落ちかゝりましたので、川上君の方では河内君が遣られたと思ひ、河内君の方では川上君が遣られたと思つて、お互ひに大きな聲を張上げまして。

「川上！」

「河内！」

と互ひの名を呼び合ひましたので、互ひに「ア命だけは無事である」と一ト安心致しますと、真中に挿まれて居ました支那人が、頭の上からグララグララツと落ちた煉瓦に辟易して、忽ち其場に匍匐になつて居ました、所が今兩方に居る二人が、川上！河内！と大聲に呼び合つたのを聽付けて、其所から這ひ出しましたのは好いが、其這ひ出した支那人の背の上は、敵彈に打ち落された煉瓦が二枚も三枚も乗ツかつて居ましたには、川上河内の兩君が顔を見合はして吹き出しました。



劇戦の内くわせんのうちにこんな吹出ふきたす様な滑稽くわげいな事こともあつたのですが、何なにしろ大砲たいほう攻めと火攻ひせめを遣やられたものですから、味方みかたは少すくく後方こうほうの銃眼じゅうがんに退たい却きやく致いたしますと、敵てきは大きな赤あかい旗はたを親王府しんわうふの内うちに進すすめて、次第しだいくくに進撃しんげきして詣まります、味方みかたは是これを狙撃そげきして三人許さんにんばかり斃たしましたが、敵てきは構かまはず突進とつしんして詣まつて、火箭ひやで到頭大屋たうとうたいやくに火ひを付けました。親王府しんわうふの本家ほんけとも云いふ可べき大屋たいやくに火ひが付ついたものですから、其火災そのくわさいは一時頃ひとときから始はじまつて、夕方ゆふがたになるも鎮しづまりません。夫それで歩哨ほせうに立たつて居ゐる者ものを除のぞくの外ほかは、陸戦隊りくせんたいも義勇兵ぎゆうへいも支那教民しなけうみんも總出そうでになつて、夜半頃迄なつかさまで防禦ぼうえいの銃眼じゅうがんを築きいたので御座ございます、此時このときも檜原書記官ひはらしきくわんは夕飯ゆはんも食たべずに教民けうみんを指揮しきして奔走ほんそうなさいました。此夜城外このよじやうぐわいの南方なんぽうに當あたつて、頻しきりに砲聲ほうせいが聴きえましたので、愈々いよく援兵えんべいが來きたと云いふ噂うわさが起おこつて、夜よもろくに寝ねられなかつた程ほどで御座ございます。

す、其所そのところで九日あつはの朝早あさはやくから、支那教民しなけうみんを籠城區域外ろうじやうくわいへ偵察ていさつに出でしました所ところが、董福祥とうふくしやうの兵へいは海岱門かいたいもん大街たいがいに榮祿えいりくの兵へいは齊化門さいくわもん内に集あまつて居ゐて、少すくしも援兵えんべいの來きた様子ようすは見みへないと云いふ注進ちゆうしんで御座ございます、是これには一同いどうガツカリ致いたしましたが、愈々いよく援兵えんべいが來きないとになると、益々ますます防禦ぼうえいを堅かたくせねばならぬのですから、昨日きのう前額ぜんがくに負傷ふしやうして未だ繃帶ほうたいを取と替かないで居ゐる間瀬水兵まぜすゐへいさへ、夜よを日に繼ついで銃眼じゅうがんを造つくつて居ゐりますが、敵てきは牆壁じやうへきから身軀みんがたを出だすと狙撃そげき致いたし、牆壁じやうへきの陰かげで働はたらいて居ゐると石瓦いしかはらを投なげ付けて、頻しきりに味方みかたの工事こうじを妨害ぼうがい致しますけれども、間瀬君まぜくんは例れいの元氣げんきで少すくしも順着じゆんじやくせず働はたらいて居ゐますと、夜よの九時頃じゆうしきで御座ございます、敵てきが石投いしなでブーンと許ばかり投げ付つけた可かなりの石いしが、場所ばしよもあらずに間瀬君まぜくんの前額ぜんがくに中あたつて、昨日きのう繃帶ほうたいした許ばかりの負傷ふしやうの上に今日けふ亦また新しい一つの負傷ふしやうを重ねかさまして、繃帶ほうたいの上うへから復繃帶またほうたいせねばならぬ始末しまつでし



たが、夫でも間瀬君は休業致しませんでした義勇兵の小寺梅吉君も是と同時に、敵の飛ばした石の爲め、丁度眉間に籠城紀念の一生傷を拵らへました。

三三三

河内水兵久し振りに全身を洗ひ清めて

敵か味方か解からぬ銃丸にて戦死の事

二等水兵で御座いました河内三吉君は、新潟縣の住人で至極元氣な男でございましたから、何時も激戦のある度に飛出して、夜中の歩哨などには能く銃眼に就た儘眠つて居ます。

「オイ、河内君眠て居てはいかんぢやないか」

「否、眠て居ましても私が茲に居れば茲は大丈夫です」

斯う云ふ物に頓着せない河内三吉君が、七月十日の午前八時頃で御座

います、親王府の井戸端に錫の金盥を持つて来て、赤裸になつて頻りに身軀中を洗ひ清めて居ます、無論籠城中は衛生隊から一同に注意致しまして、暇さへあれば手足を洗ひ身軀を拭く事を命令してあつたのですが、河内君が赤裸になつて、しかも總大將の柴中佐などが居る本營の前の井戸で晝日中に身軀を洗つて居るのは物珍らしい様に思つたものですから、山方看護手が縋帶所から覗いて居ますと、河内君は悉皆身軀を洗ひ清めて、篩つた軍服を立派に着けたが、跣足の儘で靴を踏みながら縋帶所に遣つて來ました

「看護手看護手」

「何か」

「今身軀中を洗つて見ますと久しく湯に這入つて洗はないのですから、指の股に悉皆水虫が出來て居ます、何か薬を下さいませんか」



夫で看護手は適當な藥を脚の指につけて遣りますと、河内君は喜びの禮を述べながら靴足袋を穿いて、今銃聲の盛んに起つて居る、第六區の方へ馳せ去りました。

此七月十日の日は朝早くから、敵は佛蘭西伊太利及我日本の方面を攻撃し、特に日本の方面へ野砲を向けて牡丹臺の舍營を砲撃致しまして、教民隊の一人が輕傷を負ひましたから、暫く歩哨を後方に退けて敵の砲彈を避けて居ますと、東北の方面に當つて、激烈なる小銃射撃を始めて詣りました此時茲に歩哨に就て居ましたのが、皆義勇兵で小川量平、平野守信、川上季三、木村徳次郎の諸君で御座いまして、安藤大尉の後を引受けて義勇隊を指揮して居られた守田大尉も丁度此所に居られました、所が敵は一つの銃眼に板を寄せかけまして、此方から向ふの見えない様に致して居ます、其所で守田大尉が誰かに命じて、此

銃眼の板を取除けさそうと思つて居る所へ、身軀中を洗ひ清めた河内君が鐵砲擔ひで遣つて來ましたから、守田大尉は河内君と木村君に、此銃眼の板を取除ける事を命じました。

守田大尉から撰ばれまして此剛膽の二人が、敵丸を胃して前に出ますと、敵は諸方から二人を狙撃致しましたので、此時の敵丸は眞實に雨霰の様で御座いまして、遠が剛膽の兩君も一時は物蔭に蹣跚致して居ましたが、少し敵の射聲が緩むと同時に、河内君は獨りで駈出しな

ら。『好しく己が獨りで取つて遣る』云ふが早い加十數間の向ふに駈抜けて、溝の様になつて居る所を向ふに飛越へました、後に残つた川上、平野の兩君は互ひに顔を見合はして。



「味方が往たから打つな打つな」と云ひ合つて居ます時、モウ敵の方に狙ひを付けて居ました小川量平君は、ズドンと一發打ち放した、丁度此時溝の向ふへ飛越へた河内君は、コロ／＼と溝の中へ轉がり落ちて、ウーンウーンと唸つて居ますが、敵丸の烈しく來ます所ゆへ是を助けに行く事が出來ませぬ、少し静になつて往つて見ますと、河内君は後頭部を打抜かれまして其腦漿が四方に飛散つた儘、モウ息氣の根は御座いません、其所で其傷が後から來て居るとかイヤ前からだとか云ふ争ひが御座いますが、兎に角戦死前に全身を洗ひ清めた程ですから、是が河内君の持つて生れた壽命の盡きたので御座いませう。

三四

寢臺に坐た小川夫人圓禪の爲に膝を打れ

茶碗を持た石井夫人跛りながら逃走す事

籠城中の婦人方に就きましては、随分種々の批評が御座いましてや日本本の婦人は働かなかつたとか病人の世話をろくに爲なかつたとか、たまに言葉の解る日本の婦人が介抱に來て呉れて、やれ／＼嬉しやと思つて居ると、朝來て便器をつき込んだ儘で、少しも其掃除に來て呉れなかつたとか、一同の籠城者が種々様々に悪口を申します中で、感心なのは中川軍醫夫人幾代子で御座います。  
中川幾代子は小川ふみ子と共に、繃帯を始め裁縫一切の事を擔任なさいます外に、何時でも何か兵員の補助になる様にと心掛けて居られます、或時山方看護手が飯の食べられない病人の爲に、炊事隊の方へ



鶏卵を請求致しますと、鶏卵は一箇も御座いません、ソップを拵へる様に頼みますと、外の事が世話しいから兎てもソップなど拵へて居られぬと断られます其所で看護手が涙をこぼさぬ許りに、此事情を中川軍醫に話して居ますと、夫人の幾代子は側から

『向ふで出来ませねば、妾の方で拵へて上げましょう』

と親切に云つて、澤山ソップを拵へて渡しましたから、病人が嬉し涙にむせんで此ソップを啜つた事も御座います、又英吉利公使館の方へ引移りましてからも、親王府から日本兵の使者に来るのを見る度に、一には國の爲め二には我々婦人の爲に斯く迄辛苦艱難を爲さるかと思つて、一杯の酒でもあれば兵員に飲ませます、すると或氣の合はぬ夫人が。

『兵隊に酒を飲ませてはいけませぬ、敵の來た時酔はらつて居て何の

役に立ちますか』

と誹つたので、中川夫人は泣いて口惜しがられた事も御座いました。

是等の婦人方が英吉利公使館内に引越されました時、英吉利の方では西公使の事務室と、其夫人の病室に特別の室を用意し。六疊位の室に寢臺四箇を据えまして、是を聯合病院内日本負傷者の病室と致し、留學生の室であつた八疊と四疊位の二室を、日本婦人の寢室に宛てたので御座います。

其所で四疊の室に在つた寢臺は、始めから石井夫人らく子の寢臺と極めて、他の婦人は八疊の方に寝る事になつて居ましたが、七月十日か十一日の午後で御座います、小川夫人のふみ子が感冒の氣味で御座いました、頻りに頭痛が致しますので、石井夫人は其寢臺を開け渡して、



小川夫人が頭痛のする頭を押へながら寢臺の上に座つて居ますと石井夫人は九才の操、七才のかよと云ふ二人の嬢さんを連れて次の室に出で詣り、中川夫人とアンペラの敷物の上に並んで、種々な世間話しを爲て居られますから、若杉の妻君子よ子は氣を利かしまして茶を入れました、茶飲茶碗を石井夫人の前に差出しますと、石井夫人が右の手で是を受取つた塗炭に、頭から鐘をオツ被せられた様な氣持の、何とも云へない否な大きな音が爲て、隣りの室は一面の烟に蔽はれて仕舞ひましたから、二人の嬢さんは泣き出す若杉の妻君は呆れる、石井夫人は右手に茶碗を持つた儘、左の手で中川夫人の手頸を掴んで、ニジリながらにドン／＼逃出し。

『助けて下さい』

と云ふ聲の誰の口からか出た、中川夫人は小川夫人の事が氣にかゝる

が石井夫人に右の手頸を握られて居るから、戸口の方に曳寄せられつ

『小川さん小川さん』

と呼びますと小川夫人は小さい聲で。

『大丈夫です大丈夫です』

とは云つたが、大方一貫目もあらずと云ふ、舊式前込めの圓い敵彈が、寢臺の側の壁を打抜きまして、室一面にバット立ち昇つた埃塵の中から、ドスンと寢臺の上に落ちまして、小川夫人の左の膝の少し上に觸つたものですから、大丈夫ですとは云つたが何だか少し氣が變になつて獨りで寢臺から下りる事が出来ません、其中に助けて下さいと云ふ聲を聽付けた澳太利人が駈付けまして、小川夫人を扶け下し、氣付けの爲に是をお飲みなさいとて、ウヰスキーをグット一口飲ましたから、



こんな強よい酒に馴れない小川夫人は少々銘酩の姿で。  
『足が何だか……足が何……だか……』  
と千鳥足に蹠跟と爲て居られたには、一同の婦人が氣の毒と云ふ内に  
も、クス／＼と笑いの聲を洩らしたので御座います。小川夫人の膝の  
上は少し赤く色づいて居りましたが、唯少し落ちた弾丸に觸つた計りで  
したから、直ぐと是は癒くなりました。

三五

榎原書記官の獨り言遂に遺言と爲り

川上和尙の豫言妙じくも適中のこと

七月十一日の午前六時頃から、第五區に向つて頻りに敵の攻撃が御座  
いましたが、午後からは例の野砲を小高き砲臺の上に据えまして、味  
方の防禦塙壁をさん／＼に打ち碎きます、其所で此塙壁を修繕致す爲

に、二等書記官榎原陳政君が支那教民五名許りを引連れまして、一番  
塙壁の破損致して居ります所へ出掛けて詣りました。  
榎原君が出掛けて詣ります途中で、炊事隊の中根師人君に逢ひました  
から。

『中根さん来て下さい』

と云つて支那人を先に立て、中根君を是に繼かして、自分は一番後か  
ら破壊の塙壁の所へ詣つて見ますと、思つたよりは酷い破損で御座い  
まして、是を修繕して元の通りに塙壁を築かうと云ふには側に有り合  
した煉瓦許りでは役に立ちません、夫で榎原君は塙壁の積上げ方を中  
根君や教民に任して置いて、自分は獨り煉瓦の在所を捜して居ます、丁  
度此邊に二等水兵の澁谷宇吉君と、義勇兵の大和久義郎君が、一人の  
教民隊と三人で歩哨に就て居る銃眼が御座いまして、銃眼の片側に一



つの門が御座います、此門を向ふへ出ると澤山煉瓦が飛び散つて居る様子ですから、榎原君は獨りで此門を出ようと爲た、是を見た大和久君は慌て、榎原君を呼留めました。

「榎原さん其門の向ふは丁度敵の正面に當つて、なか／＼砲彈が來ますから危ない危ない」

榎原君は一旦そうですかと云つて引返へしましたが、暫くして復二三人の教民を連れて詣つて、此門内の煉瓦を運び出させようと致しましたが、成程砲彈がピュー／＼來て居るので、教民は皆逡巡して門の向ふに這入り得ない、夫で榎原君が先に立つて此門を這入つて、四五間も住つたかと思ふと、一發の敵彈がピューツと數間先きに爆發致して、榎原君は左の脚の膝節と踵の間位に當る所の内側に彈片を受け、其邊の骨を折つたものですから、アツと云つて其場に倒れて仕舞ひま

した。

跡に殘つて居ました中根師人君が忽ち此所に馳せ付けて詣つて、支那教民を指揮しながら、是を繃帶所に運ばせませ途中、榎原君の氣分は至極確なもので御座いまして。

「脚が痛いから觸らぬ様に爲て下さい」

と二度許り申しました、繃帶所に詣つた時も中川軍醫が如何ですかと尋ねますと。

「痛い痛いが大した事はありません」

神色自若と爲て居られたが、無論重傷で御座いますから、應急の繃帶を致し急造擔架に載せまして、支那教民が是を擔ぐと、中根君其側から蝙蝠傘をさしかけて、静々聯合病院に送られます此時榎原君は獨り言の様だ。



此位の傷なら一週間位で癒つて、復銃眼を拵へて遣る』  
 と云ひ遣されましたが聯合病院に往つてからは、獨逸の一等軍醫ウエ  
 ルデー君が前後四回の手術で骨に密着して肉内に滯つて居る弾片を  
 取り出されましたのが廿一日の事で御座います、所が此手術以來榎原  
 君は非常に衰弱致しまして、頭が外れた様になつて口もろくに利けま  
 せん、廿二日から破傷風を惹起して廿四日に他界の人と爲られます其  
 所で方々から寄せ集めました板片で、ほんの身軀の這入る許りの棺を  
 拵へ是れに遺骸を入れまして支那教民に擔がせ、川上和尙が導師  
 となつて西公使、石井書記官、鄭通譯官、山本寫真師などが供に立  
 つて、日本公使館の裏に設けた新墓地に葬むられます。  
 是れ迄戦死者を此墓地に葬むります時には、兼て一旒の國旗が拵えて  
 御座いまして、是を一々棺の上に覆ふて、川上和尙のお經が濟むと、

復其國旗を外して次の葬式に仕舞つて置たので御座います所が榎原君  
 の葬式に當つて、如何した拍子か此國旗を其儘に埋て仕舞ひましたか  
 ら、山本君は思ひ出して。  
 『川上さん間違つて國旗を埋て仕舞ひました』  
 『夫で宜いモウ是で國旗の用はないのですから』  
 果して川上和尙の豫言通りに、榎原君が籠城者中最後の戦死者で御座  
 いました、再び國旗の必要は御座いませんでしたが、負傷の方は此後  
 も三人許り御座いまして、榎原君の負傷致した十一日の戦ひにも、三  
 等水兵の清水竹五郎君が胸部に砲弾を受けて鎖骨を打ち折られたので  
 御座います。



三六

間瀬水兵竹竿の先に爆裂弾を吊下げ

小川工學士銃眼の反映鏡を發明の事

北京籠城は世界列國から各種異様の人物を集めたので、如何な種類如何な職業の人でも、二人か三人其内に居らんと云ふ事はない程でしたが、其中で本職の散髪師は先づ若杉彌平太君、夫から専門の工學士は小川量平君許りでした。若杉君は炊事隊の一人である上に、陸戦隊や義勇兵の散髪が忙しいものですから、外國の方から頼みて詣つても、平生も顧客であつた公使などの外は皆断はつて居ました。小川君の方は歩哨交代休憩の時間には格別是と云ふ仕事がないものですから、外國の方から種々の注文が御座いまして、ヤレ信號の火箭を發明して呉れるとか又は斯う云ふ

爆裂弾を拵えて呉れいと云ふ様な話がある。

其所で小川君が考へた、此頃の様は敵が直ぐ壁一重の外に迫つて居て、賭博を打つたり喧嘩を爲て居る聲が、手に執る様に聽へて居る場所もあるに味方の歩哨は唯シツと敵が壁を破つて這入つて來るのを待つて許り居るは、退屈でもあり待遠しいから、一つ爆裂弾を發明して、是を敵の頭の上から投下して遣りましよう。二等機關兵の川名九十郎君と、山方看護手に此事を相談致して、愈よ爆裂弾の製造に着手なさいました。肝腎の藥品だとか材料が御座いませぬ。仕方がないから英吉利や伊太利に往つて、大砲を打つと其跡に火薬の藥筈が残る、其藥筈の殻を貫つて歸つて、其中に敵から打込んで詣つた團子程な鉛弾と火薬を一杯詰り込んで、五六回の試験を重ねました。上、中々旨く爆發致す様になりました。此奴は占めたと三人の發明者は



大に勇み立ち五つ六つ、此爆裂弾を戦鬪線に持つて詣つて、敵の頭上から投げ下しますと、丁度敵が車座になつて賭博を打つて居る真中へ落ちましたので、遠がの支那兵驚いた。

併し支那兵驚く事は驚いたが、折角の導火が消へて仕舞つて、一向爆発致しませんので、支那兵はドット一時に大聲を揚げて味方を嘲弄致します。此嘲弄の笑聲を聽付けました元氣の間瀬水兵は、如何にも残念だと云ふので、爆裂弾を二つ許り一所に竿の先に縛り付け、充分導火に火を點けまして、踏臺の上から煉塀を越えて、敵の笑聲の爲る頭の上に吊下げますと、支那兵と云ふ奴は馬鹿な奴で、煉塀の上から突出した爆裂弾を目掛けてドン／＼射撃致しましたから、導火よりか小銃の彈丸で此彈藥が爆発致して、支那兵は四方に逃げ散つて仕舞ひました。だが、多少の負傷はあつたので御座いませう。

夫から又一つ小川工學士は考へました、是れ迄味方の死傷者に就て御覽なさい、大抵なものには頸から上に傷を受けて居るのです、是は皆銃眼に就て敵を打つと狙ふ場合か、或は又敵が忍び込んで來は爲まいかと、銃眼から覗く時に打たれますから此通りに頸から上の負傷が多いので御座います、其所で小川工學士は自分が銃眼の歩哨に就て居なからつく／＼と考へた、敵を狙つて打つと爲た時敵から先に狙はれて負傷するは、止むを得ない事であるから敵の様子を見ようと銃眼から覗いて、運悪く負傷するは實に犬死である、何か好い工夫はなからふかと、始終考へて居られます内に、不圖反映の鏡の事を思ひ出されまして、其夫人ふみ子から小さい姿見を借受け、是れを斜に銃眼の前に吊下げ、敵の様子が見たければ銃眼に顔を出さなくとも、横から鏡を覗いて居ると、安全に敵の様子が解りますから、親王府の中に在つた大



な姿見を壊して、一々銃眼の側に鏡を吊下げました、此鏡の爲に随分負傷を逃れた人が多いので、英吉利や伊太利も此鏡を採用して居ますと、或日敵の進撃に逢ふて、味方の棄てた銃眼の側に、此鏡が吊下つて居ましたので、敵は其趣向を曉つて是から敵も銃眼に鏡を備へて、敵味方朝から晩迄鏡の覗き合ひに日を暮した事も御座います、此頃味方は毎日顔の長い馬の肉を食つて、長い籠城の辛苦艱難に肥へ太つた圓い顔も、次第に瘠せて長く見へる様になりましたから、歩哨交代で鏡を覗きます時お互ひの挨拶に。

『ヤア随分顔が長くなつて来るぜ』

三七

決死の美少年抜群の功名を博して

敏捷の英水兵稀代の早業を顯す事

川上和尙から極樂往生の極意を聽た美少年山上季三、大和久義郎の兩君は、殆んど戦争を心底から我仕事の様に致して居ましたが、幸にして兩君共微傷だも負はずに籠城を終つたのは、實に不思議の仕合せで御座います。

七月十二日の午前四時頃で御座います、川上少年は歩哨交代で第八區第四銃眼に就きましたから、例の通り熱心に此銃眼を監視致して居ますと、以前は我防禦の爲に味方の築いた銃眼で、今は敵の爲に占領せられ居る其銃眼の所に當て、コツ／＼と怪しい音が聽へて居ますから、此奴は變だど猶氣を付けて見て居ますと、銃眼の周圍に積上げた煉瓦が獨りでボン／＼飛出して居る、此奴は愈々不思議だと思つて居ると、數人の支那兵が手々に九太棒を持つて、頻りに銃眼を突き頼して居る。



彼奴等必ず孔を開けて這入つて来るなど狙ひを附け、川上少年が片唾を呑んで待ち構へて居るとも知らず、敵は果して銃眼の孔を大きく開けて、先鋒の一人が其孔から飛出した、待ち構へた川上少年御座んなれど、火蓋を切つて打ち放つ、狙ひ違はず敵の頭部に命中して、忽ち孔の下に斃れて仕舞ふと、次に進んだ一人の敵が早くも孔から飛出して居る、川上少年慌て、銃丸を込めて居る間に第二の敵はズツと進んで第三の敵が丁度孔から飛出した所だから、進む第二の敵を棄て、第三の敵を斃したが、此間に第二の敵はドン／＼と進んで、此方の銃眼の根元にピタツとクツ、イテ仕舞つたからモウ爲様がない。

此時の有様と云ふものは、敵味方とも實に九死一生の場合で、高さにすれば三尺か四尺、厚さにすれば一尺に足らない煉瓦の牆壁の裏表、川上少年が内から此方の銃眼に就いて、孔を飛出す二人迄を斃したか

ら、後の奴等は猶豫ふて居るが、第二に進んで打ち洩らされた敵の一人が、川上少年から一間に足らぬ、間近の銃眼に外から就いて、勝つか負けるか、殺すか死ぬか、互ひに呼吸を計つて居る。

前日から數名の英吉利援兵が、日本、伊太利の方面に出張つて居たが、此時川上少年が發銃の音を聞いて、後の方から一人の英兵が駆け付けると、外から味方の銃眼に忍んだ敵が、ズドンと一發不意に打た、併し狙が外て英吉利兵に當らない。

日本兵の強いのを褒め立てる爲に、外國兵が弱いと云ひ張る人が御座います、此時の英吉利兵は其勇氣と云ひ沈着な態度と敏捷な働きはなかなか日本兵の比較ではなかつた、不意に敵の側を飛んだ、其敵丸を事どもせず、直ちに小銃を棄て、腰の短銃を執出したから、是を見たら川上少年は如何するかと思つて居ると、英吉利兵は飛鳥の



如く敵の銃眼に駆け付けて、しかも短銃を握つた右手を、銃眼の孔から向ふに突出して、其下に屈んで居る支那兵を、一ト思ひの下向に打ち下したには、偵が決死の川上少年も舌を捲いたので御座います。此物音に味方は兵舎を飛出して、伊太利方面の小山から打出す、敵も次第に集つて湖の如くに雪崩れ入り、川上少年が前後三人、英吉利兵が一人、其他の義勇兵陸戦隊が二人、都合六人の敵を斃して、味方に死傷は御座いませんでしたが、衆寡の大勢は遂に争ふ事が出来ません、敵は次第に進んで詣つて、第五區兵舎の側の倒れた家屋に火を付けました、火の手が盛んに上つたので、敵も味方も一時互ひに退却致しましたので、川上少年と木村徳次郎君が先鋒を争ふて此屍骸の側に駆けつけ、小銃一挺銃丸の腹巻一筋を分捕つて詣たが、實は二人とも少々氣

味が悪つたのです。

三八

木村電工不思議の生命を拾ひ留めて

大西電工に遺言と遺言状を託する事

「ヤ大西君君の脚は如何だ」  
「難有うモウ大方好い様だが、未だ悉皆は癒り切らない、實にお前馬鹿くしいぢやないか、北京旅館の内に各國の義勇兵が集まるから、早く電燈發電機を据付けて呉れいと云ふので、一生懸命に仕事に掛つて居ると、馬鹿くしいこんな怪我を爲て、未だ戦争する事は出来や爲ない木村君お前は眞實に仕合せだよ」  
「否なか／＼そうでない、モウ来るかモウ来るかと持つて居る援兵が、未だに來ない所を以つて見ると、僕はモウ如何あつても助かる



見込はない』

『何故又元氣な君が、今日に限つてそう云ふ弱い事を云ふのか』

『イヤ今日は僕の母の命日だが、今日と云ふ今日は僕も到底助かるまいと思ふ程の目に逢つた、茲に斯う爲て籠城爲て居ても、幾らか僕の事を知つて居るのは、君と小寺の二人しかない、其中で僕も小寺も戦闘に出て何時死ぬかも知れぬ身だが、君は斯うして病院に居るから、事に依ると終迄生残つて助かるかも知れぬ、若し僕が戦死したら大西君、京都の叔母に此事を知らして呉れ玉へ、茲に金錢が是れだけでも急いで書いた遺言状があるから、是も叔母の所へ遣つて呉れ玉へ』

義勇兵中で屈指の電工、木村徳次郎君が實に打萎れて仕舞つて、兩眼からポロリ〜と熱い涙を流して居るから、是を聴た同じ電工の大西

君も共に涙にかきくれて暫らく言葉は途切れたのである。

木村君がわざ／＼大西君を病院に尋ねて、斯う云ふ遺言を爲たのも無理はない、七月十三日の午前十時十五分頃でも御座いましたらふ、木村君が第二步哨に立つて居て、敵の方が餘り静かなものですから、敵はモウ居ないの知らんと思つて、左の手で小銃の銃身を擱んで、是を身體の前に杖き立て、左の膝を折り右の膝を立て、其立てた右の膝頭に右の拳を載せた儘、ヒヨツと銃眼を覗きますと、兼て狙つて居たのでしよう、敵はズドンと打ち放した。

木村君はハット思つて顔を退いたが、敵の銃丸は上の銃眼から這入らないで銃眼の下の小さな孔からブスと来て、木村君の全身にピンと手應致しましたから、木村君は何でも臍の上の所を遣られたに違ひないと思ふと、サア臍の上が痛くて痛くて堪らない、左の手で銃砲持つ



て右の掌でシツかり臍の上を押へて、繃帶所へ飛んで詣りますと中川軍醫は青褪めた木村君の顔を見まして。

「如何した何處を遣られた」

「此所を此通りウンと遣られました」

「ソウ押えて居ては解らない手を放して見玉へ……ハテナ如何もなつて居ない様だが……」

「否ソウ云ふ筈はありません、タツタ今彼の通り遣られたのですも」

の  
「併しそう云ふ所を打抜かれて、ソウ君の様に元氣で居る筈はない……」

「……一つ洋服を脱で見玉へ」

今迄遣られたと思ひ詰めて居た木村君も、中川軍醫にソウ云はれて見ると、何だか臍の上が痛くない様である、好くく見ると洋服に孔も

開て居なければ、又血も出て居ない様である、其所で少々キマリが悪くなつたが、仕方がないから洋服を脱いで、赤裸になつて見ますと、豪いものです臍の上に直徑一寸五分もあらふと云ふ、圓い赤い痣が出て居ますが、少しも銃丸の傷は御座いません夫から段々調べて見ますと、木村君が鐵砲を前に杖いて居たので、敵丸が其鐵砲の彈裝管を打ち抜き銃臺を破り、夫で潰れて仕舞つた奴の隋力が、木村君の臍の上に来ましたが、モウ兎ても是を抜く力がないので、丁度木村君の居た銃眼の下に此銃丸が轉がつて居たのです、今から考へて見ると運さへあれば死なぬ者だが、當時木村君の考へになつて見ると、モウ駄目だ、何時か遣られる時が來たと思つたのも無理はないので、夫で大西君が遺言と遺亡狀を托したので御座りましょう。



三九

決死の義勇兵銃を棄て、徹夜銃眼を造り

英領派遣の密使却て敵の使命を持歸る事

七月十三日は先づ我日本方面の静かな日で、此夜木村、川上兩君が岡田兵曹の指圖で防禦の銃眼を造つた位が、我方面の働きて御座いますし、たから、今日はモウ各國方面とも静穩であらうと思つて居ますと、午後六時頃になつて佛蘭西方面に當り、天地も震動する許りな地鳴りの響きが致して、暫くすると耳を聳する許りな矢叫びの聲が聴えますから、何に起つたのであるかと陸戦隊も義勇兵も兵舎から飛出して見ますと、炎煙天に漲つて佛蘭西公使館の裏手は早や一面の火の海となつて居ます。

是は支那兵が得意の地雷火を仕掛けて、佛蘭西防禦の壁を破り、夫

と同時に例の松火隊が突貫して、手當り次第に火を放つたので御座います、此時獨逸方面の敵も、鬨の聲を併せて必死の突貫を致したので、籠城中何時にない大激戦が二時間も繼いで、英吉利、露西亞の兵は續々加勢に出掛ける、日本、伊太利の兵は夫れく防禦を嚴重に致しました、獨逸兵が奮戦して二十餘人の敵を斃し、敵彈八百發を分捕つたのと、佛蘭西兵が辛抱強く拒いで居たので、到頭敵を撃退致しました。此夜から翌十四日の夜にかけまして、木村、川上の兩君は、岡田兵曹の下に立つて、歩哨の勤務を止め、支那教民二人を使つて、銃眼の防禦工事を繕つて居ます、夫は敵から野砲を打込まれますので、煉瓦の壁塙ですと其壊れた破片が四方に飛散つて、彈丸よりは却つて煉瓦で負傷致しますから泥土を積上げて堤防を築いて、是で大砲の彈丸を除ける様に爲たのです、所が其堤防に銃眼を拵へねば、味方の防禦



が付かぬと云ふ事に爲つた。  
其所で箱の銃眼を拵え、泥土の堤防を掘返して是を埋ようと云ふ事になつて、警戒線内の材木屋から板を奪り出させると、木村君が支那道具で漏斗の様な箱の銃眼を五ツ許り拵へました、併し愈々是を埋めようとするには、堤防の泥土を掘返してドン／＼来る敵九の矢面に全身を露出せなければならぬ。  
最早や大西君に遺言状迄も托して、充分に決死の覚悟を極めた木村君は、敵の狙撃して居る銃眼の根元に突進んで、八寸角位の材木で是を塞いで仕舞ふと、敵は頻りに此材木を打ち抜かうとする、木村君は夫を拒いで暫く争つて居ましたが、敵は遂に此材木に油を注いで火を付けましたから、木村君は其儘逃げ歸つた様な、萬死の危険を冒して遣つて見たのですが、如何も晝の内は思ふ様な仕事が出来ません。

夜に入つてからに爲ようと相談して居る中に、支那教民から注進が御座いまして、壁一重向ふの敵が口喧ましく、明日日本の方面に突進する者には第一等の褒美が下がるよと勇んで居ます事を知らして詣りました、サア大變だ何でも今夜中に此銃眼を据付けて仕舞はねばならぬと云ふので、五つの銃眼を三つに爲て、徹夜忍び／＼に此銃眼を据付けました。  
所が此十四日の日に、英吉利から救援軍が向つて十日に出した密使が歸つて申すに、交民巷を出ると間もなく支那兵に捕へられて、榮祿の本營に押送せられ、種々取調を受けた後、此書面を托せられて歸つたと云ふ話し、其書面と申すのは、總理衙門大臣慶親王以下連名で、英國公使に宛てたもので御座いまして、其文面は斯う云ふ意味が御座いました。



過る十日の間官兵と民兵とが戦ふて、吾々と諸君との交通は全く絶へたから、竊に大に憂慮して居ました、先日吾々が意志を表明した板を掲げ出させた時、残念ながら答書を得る事は出来なくて、却つて吾々の豫期に反し外兵再び我館を砲撃したものだから、平民の間に疑惑と戒心を起さしめる様な事になつた、今日我兵が某寺に此教民を捕へてから、外國使臣皆無事である事を知つて、實に満足に堪へないのである唯圖らずも外國の援軍は久じき以前義和團に支へられて背進して仕舞つた、吾々は條約に従つて諸君を城外に護送しやうと思ふが、天津太沽間には團民が甚だ多くて、或は不測の事があらうも知れぬ、依つて吾々は諸君が眷屬々僚を連れて公使館を引揚げ、先づ總理衙門にお出でなさる事を望む、政府は信ず可き士官を出して堅く保護させ、そして諸君が歸國の事を謀りましよう、

唯諸君が公使館を出る時に如何か一兵をも隨へない様に願ひたい、それは平民の疑ひを生ずる恐れがあるからだ、閣下若し御思召があらば各國公使と謀つて明日正午迄に回答して下されたい、是が萬難交々起るの時に當つて徐に取る可き唯一段手であると考ます云々。

四〇

日本の諸兵久し振に生命の洗濯を爲し

中川十全君軍醫戦死の場合に遭遇の事

救援軍に向つて英吉利から出した密使が、計らずも總理衙門の書状を持つて歸つたので、英吉利公使は是を諸方に通知して、十五日の日に列國公使會議を開きましたが、孰れも長い籠城に糧食其他の缺乏を來し、最早や進退谷まつて居る所でしたから、丁度好い機會だ、是を種に一つ總理衙門に掛合つて一寸延しに敵の攻撃を緩めたいと云ふ方針



であつた、其所で斯う云ふ答書を總理衙門に贈りました。

列國公使が總理衙門に出頭すると云ふは、至つて危険な話であるから、其要求に従ふ事は出来ないが、外國軍から官兵を砲撃したと云はれるは大に事實を誣た話して、我々の方が官兵の攻撃に對して自衛の途を計つて居る許りである若し總理衙門の方で眞實に平和協議を遂げたいと云ふ心得あらば、信用す可き士官に白旗を持たせて其協議の使者に送つて貰ひたい。

此答書を總理衙門に持つて往つた使者が、復總理衙門の方から一封の書狀を持ち歸つた、夫には

各國公使が總理衙門に來る事を不承知ならば、政府は官兵を増して、今戰つて居る民兵を鎮撫致そう、併し外國兵の發砲する事があると、民兵を激昂さする恐れがあるから、希くは堅く是を禁じて貰ひた

い、此後は何事も萬國國際の公法に依つて協議致そう。

斯う云ふ書面の往復が英吉利公使と總理衙門の間にありながら、戰鬪線に對峙して居る敵味方は猶ほ互ひに打合つて居ます、即ち十五日の朝から我日本の方面では、頻りに防禦の銃眼を造つて居ますと、敵は第六區の堀に造つた銃眼から狙撃して我工事を妨害致し、特に此夜は敵も次第に其銃眼の位置を進めて詣つて、彼我發銃の音が聽へなかつたものですから、氣を付けの號令が三度もかゝつて、殆んど安眠したものは御座いません。

抑も此戰爭が始まりましてから、日本二十三名の戰鬪兵員中、五名は殺され六名は重傷を負ふて入院し、残る十二名の内でも七名は輕傷を負ふて、間瀬水兵の如きは前後七回の負傷を重ね、満足な兵員は唯の五名で御座います、是にマア十七人の鐵砲を持つた義勇兵が付いて、



少しも水兵に劣らぬ立派な働きを致して居ますが、是どても二人は殺され、五人は輕傷を負ふて満足なのが十人しかない、此十五人で段々蠶食されながらも、最初五百人の守備兵が必要であると見込まれた親王府を死守して居るのですから、英吉利の公使は實に感服致しまして、十月七日に數名の援兵を送つて居る上に、十六十七の兩日に十餘名の兵員を送りまして、半分宛日本の兵を休養させて呉れましたので、義勇兵も陸戦隊も久し振りの日曜に逢ふた心地で、着の身着の儘の垢でニシメたシャツなどを洗ふと共に、生命の洗濯を致したので御座います。

所が此十六日の午前八時頃に、英吉利の兵員を指揮致して居ました、海軍大尉のストラウツ君が、タイムス新聞の記者モリソン君と一所に、日本の方面を見廻りに來て、牡丹臺の下で打たれたと云ふ急報が御座

いましたから、中川軍醫が駆け付けますと、ストラウツ大尉は左大腿の上部に貫通銃創を受けて倒れ、タイムス記者のモリソン君が一人でマゴ／＼致して居ますから、中川軍醫はモリソン君に大尉の腰の所を擡上げさして、腸骨動脈の腸部壓迫繃帯を爲て居られますと、敵は此三人を目掛けてドン／＼狙撃致し、モリソン君も右大腿に貫通銃創を受けましたから、忽ち其場に卒倒致しました。

味方の居ない敵九雨飛の裡に立つて中川軍醫唯一人、右と左に危篤の重傷者を控へまして、進退殆んど谷つたものですから、誰か味方は居ないかと振返つて見ると、遙かの後に伊太利兵が塙壁の陰に潜んで居ます、早速手眞似で此伊太利兵を招きますと、彼は頭を打振つて、早く逃げろと手直似で知らせます、其内にも敵はドン／＼狙撃して殆んど我身が危ふくなつた、併しストラウツ大尉の壓迫繃帯が緩んで出血



致す事があれば、兎ても生命は助からない、負傷者の生命を救はんか  
我身の生命が助かりそうもない、我身の生命を全ふせんか負傷者の生  
命は到底覺束ない、中川軍醫は敵丸雨飛の裡に立つて、暫く左右の負  
傷者を持って餘して居ましたが、臆て最後の決心が付いて、  
『軍醫の戦死するはこんな時だ』  
と獨り叫んで、平氣に二人の應急手當を爲て居られますと、幸にも  
柴中佐が遙かに此有様を認めまして、教民に急造擔架を擔がせて應援  
に詣られたので、中川軍醫は二人の負傷者と共に斯る萬死の虎口を逃  
れたので御座います。

四一

戰場七箇の新佛孟蘭盆の施餓鬼を享け

昨日の修羅場今日の青物市場に變る事

筑紫辨館員中村秀二郎、三等水兵町野兵右衛門、二等水兵鎌田萬次郎  
三等水兵礎貝桑藏、外交官補兒島正一郎、陸軍歩兵大尉安藤辰五郎、  
二等水兵河内三吉七君の墓標が、一々戦死の月日を記入して、戦死の  
順序に公使館裏手の假埋葬地に建つて居ますが、今日は地獄の釜の蓋  
も開くと云ふ、七月十五日の事で御座いますから、戦死者一同の法事  
を營むが好からうと云ふので、川上和尙が洋服の上に墨染の袈裟衣を  
着けまして、西公使以下英吉利公使館に居ます男女、並に歩哨に立た  
ない陸戦隊義勇兵の連中が皆集まりましたが、何を手向くる供物も御  
座いません所から、杉山書記生の葬式に使ふ筈で買入れた造花を執出  
して、ピールの空壺を花筒の代りに爲て、川上和尙の回香が濟むと、  
一同それ／＼焼香を爲たのです。  
此人々が段々に戦死致しました時は、随分妙な話ですが、其人々の



親友でさへ、實に餘り悲しくなかつたのです、夫は誰しも何時か我身も斯うであらふと、戦死と云ふ事を唯晩いか早いかにか考へて居たからです、所が斯う改まつて孟蘭盆の施餓鬼などを遣つて見ると、何だか悲しくなつて詣つて、言はず語らず一同が同じ感に打れて居る時川上和尙がヒヨウキンに。

『本國ではモウ私共を戦死したもものとして、新佛に盆の祭りを爲て居ましよう』

と云ひ出したので、並み居る一同は胸一杯に塞がつて續く言葉が出ま

せんで爲た。全体此十七日の日は英吉利兵が半分助けて呉れて居る上に、敵から一向打し出しませんので、氣樂にも盆の法事などが出来たのですが、第一區東門の邊には相變らず、原大尉部下の水兵が歩哨に立て居ますと、

軍人ど見へない美服の支那人が三人許り、一ト所に立つて何か頻りに密談を爲て居る様子ですから、我歩哨の水兵は打つが好いか打たないが好いか、暫く互ひに猶豫ふて居た、チアに未だ公然休戦と云ふ譯でないのだから、構ふ事はない打つて遣れいと云ふ事になつて、一人の水兵が一發打つと、狙ひ外れて其銃丸が中央に立つて居た支那人の股を潜ると、三人共吃驚仰天して逃げて仕舞つた。

夫から暫くして鐵砲を持たない支那兵が銃眼の外に出て、何か手眞似で打つなど云ふ様な風を爲るから、此方も手眞似で腰に下げて居る劍を捨ていと云ふと、彼は忽ち帶劍を取つて家根の上に投げ上げた、味方の水兵は面白がつて來々と云ふと、彼等は喜んで懐を開き團扇を使ひながら遣つて詣りました、其所で彼等の目をハンケチで縛つて本營の柴中佐などの所に連れて來ますと、彼等は不思議そうな顔をして



最早や休戦になつて打合ふ事を嚴禁されて居るから、親王府の庭を拜見に出ましたと云ふ、如何にも夫に相違のない様子ですから、太浩や天津の模様を聴糺した上で放還して遣つた、すると佛蘭西の義勇兵で支那兵に捕へられた者があつたので、總理衙門から送還して詣つて、茲に愈々兩軍の休戦と云ふ事が實際の事實に顯はれましたのです。所が其翌十八日から支那兵が商人に化けたものか味方の防禦線の外れの小屋迄、雞卵や野菜を賣りに詣りましたから、林良茂、杉幾太郎の兩君が買入れ掛りとなつて、價値の高下を云つて居る所ではない、雞卵を十箇持つて來ても一兩、十五持つて來ても一兩、一兩の銀貨よりないのですから、何でも多少を論ぜず一兩の銀貨を單位として、ドシ／＼食料を買入れて居ますと、列國の方でも此買入れが始まつて、終には支那兵モーゼルの銃丸を賣りに詣つた、其相場が始めは一箇二十

錢であつたのが、幾らでも續々賣りに來る所から、忽ち單發の銃丸が一箇六錢、連發の奴が一つ八錢と云ふ風に下落して、昨日迄砲烟彈雨の修羅場も、今日は敵味方の間に笑ひ聲のさいめく青物市場と相成りました。

四二

數千の教民犬猫を食つて饑渴を凌ぎ  
若杉彌平太君深草の少將を氣取る事

北京の籠城中に一番糧食に困難したのが、各國の公使館に避難して居た數千の教民で、老人や若い者は犬でも猫でも見付け次第に打殺して、丸煮に爲て食ふと、婦人小兒は槐の樹の葉をユカイて餓を凌ぐと云ふ有様で、殆んど饑饉の時も同じ様な始末で御座いました。我日本籠城者は是等の教民程にも苦しまなかつたが、列國の公使館中で



は一番糧食に困難致しましたのです。  
何を云ふにも始めから支那米二十俵と昆布百斤計りより買入れないの  
ですもの、炊事隊諸君が骨の折れたも其筈です、是が西洋の料理だと  
云ふと、麵麩に冷肉でも遣られませんが、日本の賄と爲りますと、味  
噌、醬油、鹽、漬物と云ふ様な、下らぬものが餘程大切となつて詣る  
ので、炊事隊の一人か二人は、毎日の様に徴發に出掛けて居なければ  
なりません、其所で林君が種々奔走して、天津引揚の時の煎米を教民  
の持つて居る玄米と易へたり、若杉君がトロクスンと云ふ豆を二俵許  
り探し出して来て、英吉利から毎日四十斤宛分配して呉れる馬肉と煮  
たり、墨の様な鹽を洗つて使つたり石塊の様な辛い〜漬物を削つて  
嚙つたり致して居る内に、是等の物品を徴發して居まして親王府の建  
築物は焼かれたり壊されたり、又インベックスの雜貨店などは、英吉

利で鑰を卸して保管して、仕舞つて、公使から書付けを貰つて行かぬ  
ば何一つ渡さぬ事になりましたから、愈々兵糧攻めに逢つたので  
す。  
丁度此頃の事で御座います、中川軍醫が義勇兵から鶏卵三箇をお禮に  
貰つて、其二箇を負傷者の食料に頒つて、一同の負傷者を泣かせまし  
た、其筈でしよう英吉利から鶏卵一箇を三兩に買う五兩に買うと云つ  
て来ても、鶏卵一箇もなかつた程です又此頃柴中佐が石井書記官の所  
に往つて、極小さい洋杯にブランを一杯注がれた時、是丈のブランが  
あれば三人の負傷兵に分けられるとて飲まなかつた話しが御座ます。  
是れ程糧食に缺乏して困つて居た時ですから、支那人が賣りに詣つ  
た鶏卵や西瓜などを争ふて買ひに出て、修羅場が殆んど市場に爲つた、  
其所で英國公使から炊事隊の外は一切買はせない様に注意があつた



が、何しろ此十八日には炊事隊が充分野菜などを買込んで、久し振で生涯に覚えのない旨い飯を食つた上に、福島少将からの密使が着いて、シーモア中將の撃退された事、第五師團が本月二十日迄に天津に着いて、本月末には北京に來らんと云ふ喜びの音信を齎らしたから、陸戦隊も義勇兵も天に歡び地に喜び、久しい籠城に憔悴した顔色が此日始めて照り輝いた、中にも炊事隊の諸君は、今日許りは一同が旨そうに食事を爲たのを見て、嬉しくて嬉しくて此夜は殆んど眠られぬ位。親王府の井戸の側に竈を二つ築いて、二斗鍋を其上にかけて、米袋の脇にアンペラを敷いて、支那提灯を吊した下に、毛布にクルマツて眠入つて居るのは林君で、寢轉がつて此夜深に話し合つて居るのは、竹内菊五郎君と中根師人君である。

「オイ中根君今日は實に愉快であつたナア」

「ウム皆が眞實に旨そうに食つたので、我々も飯が旨かつた……林君は晝の奔走に疲れたと見へて、好く眠入つて居る様だナ」

「林は好く寢入つて居るが、若杉は如何した」

「大方復提灯さげて英吉利公使館に通つたのだらう」

「アンナにマア女房と云ふ者は戀しくて堪らないものか子」

「若杉は未だ子がないからだ」

「子が出來ると女房の方は忘れるか子」

「忘れると云ふ事もないが、僕は斯うして籠城して居ても、今年三つになる男の子の方を餘計に思ひ出すよ、誰やらの古歌にも云つてあつたぢやないか。」

子を思ふ焼野の雉子かな

けむりの内にまた鳴くなる



どか何どか云つた様な歌があつたが、眞實に此古歌の通りで、子ど  
云ふものは可愛いものだよ、若杉も子がありさへすればア、英吉利  
に通つて居まい』  
『大方昔し圓山に通ひ詰た時の事を想ひ出して、復其通り遣つて居る  
のだらふ』

『圓山と云へば長崎の遊廓ぢやアないか、何か圓山に若杉の艶聞でも  
あるのか子』

『あるともく君は未だ、若杉の妻君に對するオノロケを聴かないの  
か、彼の妻君は子一若杉が三年以前に』

談話は漸く佳境に入つて、云ふもの口に勿體つけ聴くもの耳を澄まし  
た刹那に、知るや知らずや談話の主人の若杉君が、息氣せき切つて炊  
事場に駆け戻つたが、此時の若杉君の顔色は此世の人とは思はれな

つた。

四三二

炊事場の西洋十能何處へか姿を隠して

若杉彌平太君屍骸掘返の失策露顯の事

誹ると云ふ程でもないが、今現に若杉君の噂を致して居ます所へ、若  
杉君が血相變へて駆け戻つたのですから、竹内君は素知らぬ顔で眠込  
んで仕舞ふ、仕方がないから中根君は起上つて若杉君の顔を見上げる  
と、其顔色は此世の人と思はれぬ迄に青褪めて、鬚の生際から冷汗が  
兩の頬を傳ふて、總身はガタ／＼慄へて居る。

『ヤ若杉君如何した如何した』

若杉君は漸く生返つたと云ふ風に、溜息氣を吐いて胴震ひ爲なから  
『ア、中根君か、水をかけて呉れ給へ、早へ水をかけて呉れ給へ』



中根君は妙な事を云ふと思つて、呆氣にとられて居ると、若杉君は兩手を前に差し延ばしてシレッタそうに待つて居る。

「オイ早くさあ水をかけて呉れないか」

「水をかけて呉れるツテお前、何處へ水をかけるのだ」

「此手によ、此兩手にシツカリ水をかけて呉れ給へ」

中根君は變な事だと思ひますから、益々根問ひが爲たくなる。

「何故そんなに兩手に水をかける」

「マア何でも好いから早く水をかけて呉れ給へ、オ、臭いオ、臭い」

「ナニ臭い、何が臭い、如何して臭い」

「知らずに土に手を突込んだ所が、夫は如何も臭かつた臭かつた……」

「土にお前手を突込むツテ、そんな奴があるものか、如何して手を土に突込んだ」

「何でも好いから早く水をかけて呉れ給へ、實は大變に見當違ひを爲  
た」

中根君は澁々立ち上つて、炊事場の水を若杉君の手にかけ遣ると、

若杉君は兩手の皮の剥ける程擦つて居るから、眠込んだ眞似を爲し居

る竹内君が、頭から被つた毛布の中から、達磨の様に目をキヨロク

爲せて居る。

「オイ、そんなに洗はなくとも、モウ大抵で好からふ」

「否未だなか、臭味が退かない」

「全躰何がそんなに臭いのだ」

「實は僕が大變な見當違ひを爲た」

「見當違ひは解つて居るよ、誰がお前見當違ひを爲ずに土の中へ手を突込む奴があるものか、



如何云ふ見當を違へたのだ』

『實は僕がちやんと晝の内に見て置た』

『何を』

『大切に油紙に包んだ奴を』

『ウム大方支那人が油紙に寶を包んで、埋る所を見付けて置いて、其奴

を堀返しに往つたのだナ、併し如何してそう手が臭い』

若杉君は青褪めた顔を赧くして口を噤んだ、中根君も氣の毒になつて

問ひ詰めたなかつた、達磨の目を光らせて居る竹内君は、残り惜そうに

失望した若杉君は鼻の先に手を突付けて嗅ふて見ながら、ヤレ〜と

重荷を卸した様に眠て仕舞つた。

翠朝早く目を醒した竹内君と中根君が、互ひに顔を見合はすが早いカ。

『一昧若杉は如何したのだらふ』

思はず知らず同じ事を尋ね合ふた、併し兩君共に斯うだらうと大體の

事を想像した許りで、睨と爲た事は無論知れよう筈がない、其所で愈

々朝飯を焚く時刻になつて、竈の下に火を焚き付けると、昨夜迄竈の

側に在つた必要の西洋十能が見當らない、罪のない教民を叱り飛ばし

て方々を捜し廻らせる、晝頃になつて何所からか捜し出して來て、

何處に在つたかと云ふと、堀返しした屍骸の側に突込んであつたと云ふ、

夫から段々調べて見ると、昨日教民の内に頸を釣つた奴があつたの

で、コッソリと油紙に包んで埋たのを、若杉君が物蔭から覗いたから、

此奴は必定寶物を隠すのであらうと思ひ詰めて、悉皆人の寢入つた夜

半頃に、西洋十能で堀返すと、なか〜寶が深いから、モウありそう

なものだと十能を突込んだ儘、兩手を土の中に突込んで探つて見る

と、未だ柔かな屍骸の足が手に觸つたので、昨夜の珍事を惹起した事



と知れて、果は三人の大笑ひとなつたが、是は三人の間の秘密で、他の籠城者一同も、南陽の講談で始めて御愛嬌のある若杉君の失策話しを知るのです。

四四

休戦の運動に繩飛び大弓の遊戯を奨励し

煙草一本を懸賞して競争射的を催ふ事

七月の十九日は全く休戦になりましたから、支那兵が續々銃眼の牆壁に腰打掛け、手招きなどして戯れて居ますが、味方は反覆常なき支那兵を相手ですから、少しも油断致しません、一方には次第に攻め縮められて、最早や焼く家も壊す塀もなくなつて仕舞つた、狭いけれども守り易い防禦區域に、鄭通譯官や岡正一君が人夫頭となつて、堅固の銃眼を造り其下に敵丸を避ける溝を掘りますと同時に、他方には

張札を爲て、高い所から我防禦線内を見下すものは、遠慮なく此方から打つから、決して高い所に登るなど云ふと、根が香氣の支那兵ですから、銃眼の上へ顔だけ出して、來々ど手招き爲て見たり、西瓜を出して遣らふと云ふ眞似を爲たり、丸で小供の戯れの様な事を致して居ます。

總理衙門の方からも亦小供が欺す様な事を云つて來るのデ、此十九日の公文では、既にお互ひに休戦になつた以上は、交民巷南方の城壁を守つて居る、獨逸と亞米利加の兵を城壁の上から下して呉れいと云つて來ました、なか／＼如何して此城壁を守つて居たればこそ、今日迄の防禦が付て居るので御座いますから、忽ち此要求を跳ね付けますと、二十日になつて總理衙門から西太后の名義で麥粉千斤、西瓜十箇、茄子唐瓜などの野菜二車を英吉利公使館に贈つて詣りましたから、英



吉利から各國へ配分して呉れました。  
 中川軍醫は職掌柄、衛生の事には餘程注意して居られました。一同が暑いから不平を云ふにも係らず、壓制的に毛布の切片を腹に巻かせ、又炊事場には蠅が澤山居ますから、是から悪い疾病が傳染したりする事のない様に、雜貨店から徴發した金の茶椀を一同に渡して、銘々袋に入れた奴を腰に下させたり、種々注意を致して居られましたから、英吉利から分けて呉れた西瓜などはなか／＼食はせませぬ、中の赤い肉は悉皆捨て、仕舞つて、外の青い皮を煮て食はせいと云ふ嚴命です難有いのは炊事隊の人々で、此奴は旨いと中の肉を捨てた積りで食つて仕舞つて、青い皮を煮て一同に分配した、可愛想に一同の人々はそんな事とは露知らず、久し振りの野菜だと舌打ちしながら食つて居ます。

こんなに衛生の事を厳しく云つて居られますが、休戦で身軀が楽になつて、始終運動の足らない所から、戦争中は汗も出なければ暑いとも思はなかつたのが、急に汗が出て暑くなつて、身軀の疲勞が一時に出たものか、戦争中一人もなかつた内科病者が續々殖へて詣りました、腸胃加答見だのマラリヤ熱だの、日に二人か三人ない日はなかつた其所で中川軍醫は復一つ考へまして、是は何でも休戦中に運動を奨励するが好からふと、親王府に御座いました支那弓を取出させて弓を射る習古を爲せたり又細飛びを奨励なさいます、是も始め二三日の程は物珍しくて好かつたが、次第に飽いて詣つた時は誰か思ひ付いたかなかなか好い工夫を考へ出して、競争射的を爲る事に爲て、巻煙草一本宛を賞品に出した。此時分の煙草は實に貴重なもので、籠城の始めは日に十本も喫つて居たのが、次第／＼に乏しくなつてピーコックが日に



二本宛渡つた時は未だ好かつたが、夫も遂にはなくなつて、一本の巻煙草を七つも八つにも切つて、日本の煙管に詰めて喫廻しを爲る、オイ／＼早く此方へ廻はさないか、そんなに鼻から烟を出して仕舞ふのは惜いぢやないかナンテな譯で。

所が段々喫廻しも出来なくなつて、西洋人の棄てた葉巻の吹殻を捨つて来る、親王府の中から矢の羽に虫の付かぬ様に挿んであつた葉巻を探し出して来て吹ふ、そうなるご自分が獨り持つて居て、幾ら煙草が喫みたくても、氣の毒だから人の前では吹へない事になる、無ければ無くて苦しいが、あればあつて復苦しい、煙草の爲には籠城者中是を喫まない古城貞吉君の外は、殆んど云ふに云はれぬ苦しい思ひを爲て居た所へ、射的の賞品に煙草が出たから、其煙草が欲しさに一生懸命に弓の替古を爲て、知らず識らず運動も足り病氣も餘り出ませんで爲

たの

四五

北堂の地雷火數十の人家を微塵に飛散し

林杉の兩君 競争して支那兵を手懐ける事

廿一日は終日至つて靜穩で御座いまして、夜中敵兵が頻りに何か煉瓦でも運搬する様な物音が聽えましましたから、大方敵が得意の地雷火を敷設するのだらうと警戒を嚴に致しましたが、全く地雷火では御座いませんでした、廿二日は朝から曇天であつて、午後八時頃から雷が鳴り出し、徹夜の大雨で御座いしましたが、此大雨の中に突ツ立つて、休戦中だから先づ敵の來ないぞ知れて居るのに、づぶ濡れになつてシツと歩哨に立つて居たのは、随分辛い仕事でした。廿三日は朝から晴れて好い天氣でしたから、昨夜歩哨でづぶ濡れにな



つた着物を乾かすやら、種々な洗濯物を爲て干すやらの大騒ぎ、夕方になつて西北の方向に激烈なる銃砲聲が聴えましたが、是は支那兵が天主教の北堂を攻撃して居たのです、此北堂と申しますのは、北京城内に四ヶ所の耶蘇教會堂があつて、其所在の方位に従ひ、是を東堂西堂南堂北堂と名付けて居ます、是等の教會堂は皆最初から激烈なる攻撃を受けましたので、東西南の三堂は悉く焼いたり壊はされたり致して仕舞ひましたが、北堂は有名なる佛蘭西天主教の僧正フワリザイ、フワリザイ君の布教致して居る所で、孤兒院や病院が是に附屬致して居ますから、列國水兵の入京致しました時に、佛蘭西伊太利の兵四十五名が此北堂に分遣されましたので、天主教民が追々茲に避難致して、其數大凡三千餘人、是は交民巷と全く連絡を絶たれまして、獨立で最後迄防ぎ得たので、此方は休戦もなければ、厄介な公使なども居りませ

せんのので、遠慮會釋のない砲撃を受けまして、光緒十三年勅建天主堂の四壁は砲弾の痕で蜂の巣の様になつた上に、前後五ヶ所に地雷火を仕掛けられました、其穴の跡が大きいのは直徑十五六間、深さ五丈にも餘つて、數十の家數十の人を粉微塵に飛び散らしたそう御座います、講演者が實地に臨んで佛蘭西の尼さんから種々實況を聴きました時、此防禦區域内に爆發した敵彈の彈片丈を拾ひ集めたのが、三抱へもあらうと云ふ大きな箆に山盛で御座いました、此方面は全く日本に關係が御座いませんから、畧して申上げない事に致しますが、北京の籠城と申すのは、唯公使館附近が包圍攻撃を受けた許りでなく全く公使館附近と何等の連絡もない、北堂も亦公使館附近の様な包圍攻撃を受けて、能く最後迄防ぎ止めたので御座います。

廿四日に檜原書記官は死なれた、一人の支那兵が張札に構はず壁の上



に登つたから、我歩哨が忽ち是を打落した、すると其邊から支那兵が打出して氣を付けの號令が加つたが、其間に敵も打たなくなつた、此日始めて亞米利加から三挺の連發銃を義勇隊に貰ひ受けて、是なら百發百中だと互ひに其連發銃を争ひ取つた。斯う云ふ風に休戦になりまして、敵味方が青物市場で鶏卵や野菜などを賣買致して居ます内に、日本隨一の支那人とも云ふ可き、炊事係りの林君が張徳林と云ふ董福祥部下の兵と心易くなつて。「オイ如何だモウ程なく列國の援軍も来る筈だから、お前方何時迄もそんな眞似を爲て居ては、殺されて仕舞ふ許りだ、早く今の内に商買換を爲て、金儲けを爲たら如何だ」ど段々利害を説き付けましたので、張徳林は到頭日本の密使となつて、北京からの報知を天津に届けると、百兩の金を遣らうと云ふ約束が出

来ました、すると人夫頭の杉成太郎君も亦負ぬ氣になつて、一人の支那兵を手懐けまして、日に三十五兩で援軍の模様を知らせる間諜に致しました。

四六

三十五兩の間諜日毎に虚欺の注進を傳へ  
一同立腹して杉成太郎君に切腹を迫る事

愈々四周を圍まれて北京籠城となりましてから、飯よりも煙草よりも、何よりも一番渴望致しましたのが、籠城區域外を模様の聴きたいと云ふ情で御座いました、支那政府の意嚮、北京籠城中の有様官兵團匪の様子、夫から列國援兵の模様。こんな風に聴きたい事は山程あるが、夫は兎ても出來ない相談ですから、せめては其内の一ツでも確かめたいと思つて、種々工夫を凝らし



ましたが何を云ふにも七重八重に取巻かれて居ますので、成る可く敵に覺られない様な者を探偵に出すが好からうと、夜半頃に一人の婦人を忍び出させた、何時迄待つても出たきり一向歸つて来ない、好くく調べて見ると其筈です、此婦人の亭主が外に居たのです。次に小兒のある婦人を撰みまして、其兒を此方へ質に取つて、例の印度兵が先登第一に潜り込んだ玉河の水門から忍び出させると、大方殺されたのでしよう、是も到頭歸つて来ない、夫から矢張り男でなければ駄目だと云ふ事になつて、各國公使館に避難して居る教民中から氣の利いた奴を撰んで、或は北京内外の探偵やら、或は天津へ差立てる密書やらを托して、一人か二人宛毎夜の様に、例の水門から出して居た、此内で歸つて來たのがタツタ一人、是も天津に行く可き筈の奴が天津には行かないで、北京城外に出た許りで直ぐ引返へしたので

すから、少しも様子が解らなかつた。斯ふ云ふ風に探偵や密使には殆んど失望したけれども、下手な鐵砲も數打ちや當ると云ふ様な考へで猶懲りずまに出して居た、始めからモウ何十人と云ふ程になるが、一人として歸つて來たものはない、然るに七月十八日の休戦になつて、炊事事が支那兵の持つて來る野菜を買ひに出ると、其内に一人の會釋する男があつた、見れば六月下旬に日本から檜原書記官の出した使者だから、直様本營に連れて歸ると、此男は二通の密書を天津から持つて歸つた、一つは鄭領事から西公使に宛てた手紙で、一つは森中佐からの手紙であつた、此二通の手紙で我第五師團の兵が二十日迄に上陸して、聯合軍が多分月末迄に北進するであらふと云ふ事が知れた。是れ迄と云ふものは、如何かして聯合軍の消息を知らうと思つて、非



常に列國で骨を折つて見たが少しも、其様子が知れなかつた所へ、日本  
 の檜原書記官の出した密使が歸つて、始めて詳しい報知を得たから、  
 英吉利公使館では大きく之を張紙して列國の人々に知らせまして、各  
 國人共に非常に喜んだので御座います。  
 斯の如く日本の密使が、列國に並びのない大功を奏しましたので、是  
 から日本の報告と云ふと、大に列國に歓迎せられて、英吉利公使館で  
 は毎日の様に張出しを致したのです、所が復杉幾太郎君の日に三十五  
 兩で雇つた間牒は、毎日く能く物事を知らせて来る、即ち七月廿七  
 日には最早や援軍が北京に近づいたので、董福祥が西太后を奉じて逃  
 げる支度を爲して居る事を知らせて三十五兩貰ひ廿九日には昨日午前三  
 時に聯合軍が通州から四里許りの馬頭と云ふ所を攻撃し、十二時頃全  
 く占領したと云つて來て三十五兩受取り、卅日には聯合軍が馬頭を占

領し終つて猶進軍を續け、支那兵は通州と張家灣の二ヶ所に防禦の陣  
 を張つて居ると知らせて復三十五兩、卅一日になると聯合軍馬頭より  
 前進し、通州は城門を開いて降参し、北京は齊化門と西直門の外閉鎖  
 の準備を整へ居るとして三十五兩。  
 サア味方は喜んだ、愈よ八月一日には待ちに待つた援兵が到着すると  
 云ふので、英吉利公使館は常よりは大きく張出しをする、以太利の兵  
 は石油の罐を敲いて躍り出す、七月三十一日の夜は眠らずに騒いだ、所  
 が八月一日になつて例の間牒が遣つて來て、聯合軍は清兵に支へられ  
 て大安平に退却したと云つた、一同は怒つたの怒らないのぢやない此  
 間牒は常にならない、全く作り事を報告して三十五兩宛騙つて居るの  
 である、宜しく此間牒を斬つて仕舞へど意氣込んで居る所へ、林君の  
 雇つた張徳林と云ふ密使が天津から歸つて詣つたので、杉君の間牒は



愈よ化の皮を剥がれ、こんなものを日に三十五兩で雇つた杉は、宜しく責任を負ふて切腹す可しと杉君に勸告した人さへあつた。

四七

小川工學士の煙火玉屋鍵屋の喝采を博し

川上美少年當意即妙感吟の譽れを得る事

七月の廿五日は晴天で、夜明頃英吉利公使館の近傍に非常なる銃聲が聽えたが、我歩哨前は何事もなかつた廿六日は敵の營所で爆竹の音が聽えて、夜半に鐘大鼓銅鑼喇叭などを叩き立て吹き立て、ドンチヤン／＼と大騒ぎを遣つて居た、是は敵兵の内で食物を味方に賣つた奴等が鼻首に逢ふた祝ひだと云ふ風説であつたが、眞偽の程は解らない廿七日再び西太后から茄子や唐瓜を英吉利に贈つて來たが杉君の雇ふた三十五兩の間牒が、最早や援軍の餘程近づいて居る様な事を知らして

來たので一つには久々の無聊を慰める爲め、又二つには日本人の未だ無事で居る事を援軍に知らせる爲めに、此夜小川工學士が主任となつて、雜貨店から徵發して來てあつた、日本の花火を親王府内で打ち揚げた、忽ちにして金龍雲間に躍るものは昇り龍なり、忽ちにして銀星虚空に流るゝものは星降りなり、味方は坐るに兩國の川開きを想ひ出して覺えず知らず玉屋！鍵屋！と一發毎に喝采の聲を揚げて居ますと甘肅あたりの山奥から出た董福祥の田舎兵は、寔に仕方のない不風流の奴等許りで、此花火を何んと思たものか、無暗にドン／＼打出しましたので、折角の花火も七八發でも止めになりました。

廿八日の日も亦三十五兩の間牒に欺されて、愈々援兵が近日に到着するものと思ひ詰めましたから中川夫人と小川夫人に頼んで、日の丸の國旗を五十許りも造つて貰ひました、夫も白い布片や紅い布片の乏し



いのを色々に寄せ集めて拵らへたので一番大きいのを本營と兵舎に立て、後は愈々援軍の來次第、屋根の上でも木の上でも、何でも聯合軍から見へそうな所に立てる積りに致して居ました。

二十九日になつて總理衙門の方から、歸國せんとする人には馬及籠を給して、天津迄護衛を付けて送り歸そうと云つて來ましたが、最早や援兵が今日明日にも着かうと待つて居るのですから、誰れ一人として取合ふものが御坐いません。

三十日になつて支那米七分粉三分の飯も盡き、馬と豆の菜も殆んど盡きた、仕方がないから三十一日に英吉利公使館に泣き付いて、ハキヨセの支那米の古い奴や、粟や小麦の粉などを二週間の糧食に貰つて、朝は粟と支那米の粥、晝は粉の飯、晩は麥粉の饅頭で餓を凌いだ。八月一日になつて、午前三時に歩哨に立つて居た者が、東南の方向に

烈しい銃聲を聞いたと云ふので、一同大に勇み立ち、サア愈々援兵が來たと雀躍して打ち喜んだ、中川軍醫も此節は暇だから、親王府内の義勇兵が大勢車座になつて援兵の噂を爲し居る所へ來た。

「サア諸君一つ題を出すから遣つて見玉へ、如何だナ馬と豆と云ふ題は……馬と豆……」

一同顔を見合せて首を捻つた、川上和尙を抜け僧と名付けて、悪口の戯歌を作つた日々新聞の坦堂外史も。

歩哨して三度三日月を眺めけり。  
鵲のむくろをつゝくあつさかな。

なんて唸つて居た朝日新聞の筑紫二郎も、文學士の服部狩野兩君も、馬と豆の題には弱つて、容易に名句が出そうもなかつた、此時例の美少年川上季三君は、一同を見廻はして當意即妙實に大出來の答へを爲



た。

馬と豆食つて戦さを親王府。

四八

虚欺の間諜更に最後の三十五兩を騙り

密使張徳林二百兩の賞金を固辭する事

八月一日に三十五兩の間諜が、如何考へても眞實らしく思はれる様に丁度好い加減の道程に嘘の聯合軍を進めて来て、サア愈々今日は北京に着かうと云ふ日取になつてから、仕方がないから勝手に退却させて仕舞つたので、激昂して杉君に切腹を迫る者もあれば、力を落して溜息氣許り吐いて居るものもある。

『オイ／＼援兵とかけて何と解く』

『冗談ぢやない、謎どころであるものか、知らない知らない』

『知らなければ云つて聴かさう、援兵とかけて他に木のない松林と解く』

『其心は』

『唯松(待つ)許りで來(木ない)ない』

なんて洒落れて居る否氣の人も御座いました、午後一時三十分頃になりまして、東門の方に立つた歩哨が前方を監視致して居ますと、好く身軀の肥え太つた支那人が、ハンケチを振りながら段々此方に近寄つて詣ります、見れば鐵砲もなし又劍も持つて居ない様ですから、味方の歩哨は身構へを爲て待つて居ますと、此支那人は馴々しげに我哨兵に近付いて會釋しました。

其筈で御座います、是が林君の手懐けた董福祥の兵士で、柴中佐の密書を持たして天津に遣つた張徳林で御座いますから、早速本營に



連れて詣つて様子を聴くと、張は先日兵服を脱ぎ捨て、柴中佐から受  
 取つた密書を懐に入れまして、北京の城門を出ようとする、警固  
 の支那兵に捕まりそうですから、手早く密書を鴉香に吞込んで仕舞つ  
 て、漸く萬死の虎口を逃れ、首尾好く天津に着いて鄭領事に北京の状  
 況を物語り、福島少將からの密書を受取つて歸つたのです。  
 此福島少將の密書は陸軍暗號で認めてあるから、柴中佐と守田大尉が  
 是を翻譯なさいますと、第五師團の上陸が意外に困難を極めて豫定の  
 期日に遅れた爲め、其大部は既に天津に到着して居るが、未だ全部天  
 津に揃ふ譯には往かない、併し此密使の報告に依つて列國公使館危急  
 の事情を審かにして、各國軍皆大に感動し、種々北京救援の協議中  
 であるから、進軍の準備整ひ次第天津出發の筈であると云ふ報知で御  
 座いました。

三十五兩の間諜の化の皮が愈々剥げた、一同は此間諜の所業を憎むと  
 共に、張徳林の好く使命を果した事を褒め立て、約束の通り百兩の  
 賞金を渡そうとすると、彼れなかく受取らない、金が少ないから不  
 平か知らんと思つて、二百兩に爲て遣らふと爲ると猶受取らない、五  
 十兩に減しても矢張り頭を打振つて居る。  
 其所で林君が段々と様子を聴いて見ますと、此張徳林と云ふ男は山東  
 省濟南府の産で、本年三十四歳になりますが、天津に父母妻子が御座  
 いますので、一つには久々にて父母妻子に面會せん爲め又一つには百  
 兩の金を儲けん爲めに、林君から説付けられて、密使の役目を引受た  
 のですが、扱て愈々張が天津に歸つて、父母妻子に此事を話しました  
 所が、父母は大に泣き悲しんで。  
 『不義の富貴は浮雲の如し、敵人の密使として如何に巨額の金を得る』



とも、天罰遂に免るゝ事能はざらん、汝既に敵人と不義の約を結ぶ  
結びし約は不義ながらも是を果す可し、断じて不義の一金をも受く  
る事勿れ』

と呉れくも説諭されましたので、張徳林大に父母の言葉に感激致  
しましたから、約は約で果して賞金は一兩も取らぬと云つて、早速歸  
つて仕舞ひました、支那人の事情に能く通じた林君は○

『ナアニ彼奴はア、は云つて居たが、今百兩の銀貨などを持つて居る  
と皆隊長に巻上げられて仕舞ふから、ア、云つて暫く預けて置く積  
りなのです、御覽なさい今に静まると日本公使館へ使つて呉れとて  
遣つて来ますから……』

と云つて居ましたが、是は餘り支那人を見クビツた考へで面白くない  
矢張り此張徳林は父母の義言に感じたもので御坐いませう、同じ支

那人の内でも張の父母の様なエライ人があるかと思へば又三十五兩の  
問謀の様な悪い奴がある、一同は殆んど激昂の餘りに何でも打ち切つ  
て遣らふと云つて居ると、翌日になつて復三十五兩奪りに益槍遣つて  
詣りました、所が柴中佐五郎君はなか／＼慈悲深い人ですから、好く  
此問謀を説諭して今日も三十五兩遣つて、是から改心して眞實の事を  
知らせて来いと云ひ付けましたが、柴君是は少々宗襄の仁で三十五兩  
復騙られました。

四九

僅々五分の食事交代に小柴水兵忽ち負傷し

餓死より戦死と覺悟の衆最後の報に蘇る事

七月の三日は晴天、四日は午後八時から十時頃迄の降雨、十一時頃に  
烈しい銃聲が聴へましたが、我歩哨線に異状は御座りませんでした、



此朝からは公使館で風呂の湯を沸かしまして、順次に久し振の湯を浴びましたが、垢の出る事夥しい湯から出ると皆身軀が軽くなつて仕舞つた、五日は終日静穩で御座りましたが、此頃の心配は敵兵の攻撃よりも食糧の缺乏で御座いまして、英吉利公使館から各國に向つて、現在の糧食を隠さないで知らして呉れると云ふことで、其各國からの通知を計算した所で、總帥の籠城者が二週間は到底六ヶ敷からふと云ふので、英公使から各國に通知して、從來の食料を半減にせよと達して來ました所が、粉の粥や木を噛む様な固い麥粉の饅頭で、漸く饑を凌いで居る日本では、如何考へたどて是を半減に爲ようが御座いませぬ其所で鹽水で握つた握飯の夜食を止める事に致したから、夜中歩哨に立つものは驚いた、コリヤモウ兎ても駄目だ、こんな事を爲て居ては愈々饑死するに違ひない、饑死するよりはイツソ最後の突貫を遣つ

て、潔く戦死するがましだと寄々相談して居られます。併し又各國公使等の方では、斯う兵糧攻に逢ふて兵員の氣力も衰へて居る上に、以前の様に激烈に攻撃されては、徒に味方の死傷を増す許りであるから、總理衙門の引揚要求に對して、要領を得ない返答を爲て、兎も角も援兵の來る迄引延そうと云ふ考へで、五日に英吉利公使から總理衙門へ回答に及びました。其回答の大意と申すは、各國の公使と云ふものは自分の意見で自由に駐在國を引揚げるものではない、一進一退皆本國政府の訓令を待たなければならぬものであるから、希くは總理衙門の方から先づ本國政府へ掛合つて、其回答を聽かれない、と申しますものは此頃北京から世界各國に向つて打つ電報は、人を山東省の濟南府迄出して、茲から上海を経て始めて列國へ打電するの外はないので北京から濟南府迄の使



者は如何しても四五日はかゝる、各國からの回答が北京に届くには、如何少く見積つても十日以上はかゝりましようから、其内に救援軍が来るだらふ、斯う云ふ各國公使の胸算用なのです。六日に總理衙門の公文があつて、英公使の要求通り使者を濟南に出したと通知して詣りました、無論此頃は敵味方の休戦中なのですけれども、互ひに怪しいと思ふと打合ふので、毎日鐵砲の音の爲ない日は御座いませんで爲たが、七日の正午零時廿分頃二等水兵の小柴文次郎君が晝飯を濟ませて、第七區の第四銃眼に詣つて、川上季三君の飯を食ふ間、僅か五分間許りの食事交代に立つて居る間に、敵から狙撃せられて左大腿に二ヶ所の貫通銃創を受け、銃眼の下の溝に轉げ落ちて居たのを、假繃帯を致して聯合病院に送りました。八日九日十日と段々日が経つて、糧食は次第に減る、敵はソロソロ攻

撃を始めて詣つて、九日の午前三時頃などは、一時盛んに射撃されまして、段々味方の心細くなつて詣る許り、待ちに待ち頼みに頼んだ援兵も、モウシラ〜と待ちスタブレて頼み甲斐のない心地の爲て來た十日になつて、二ヶ月の長い籠城に、前後何十人を出した密使の中で、唯三人より歸らなかつた、其三人目の密使が歸つて詣つて、南蔡村の福島少將から斯う云ふ最後の吉報を傳へましたので御座います。日米の聯合軍は、八月五日北倉附近の敵を撃攘し、同六日楊村を占領せり、而して日英米俄の聯合軍は、本日楊村を發し北進の途中、午前八時二十分南蔡村に於て貴書に接し、北京の状況を審にし、衆皆公使以下の恙なきを慶し、併せて一日も早く我聯合軍の北京に到達し、公使以下貴官等を其苦境の内より救出せん事を期し師團長以下衆心憤激す、聯合軍は意外の故障あるに非ざれば、九日河西務、



十日馬頭、十一日張家灣、十二日通州に到る豫定にして、其北京城下に進出するは、蓋し十三四日の兩日ならむ。

八月八日

福島少將

柴中佐殿

五〇

敵前の明月に笛尺八手風琴の合奏を演じ

親王府内に今を盛りの朝顔を陳列する事

盲龜の浮木と云はうか優曇華の花と云はうか、救援軍が愈々十三四日に北京に來ると云ふ、喜びの音信を受取りました籠城者一同は、殆んど譬へようのない大喜びで、今迄九死一生と云ふ絶望の淵に沈んで居たものが、急に蘇生の思ひを致しますると同時に、茲に復一つの心配な事が起つて詣りました。

夫は丁度本國でも心配致して居ましたと同様に愈々救援軍が北京に到着した曉は、彼の亂暴な支那兵の事で御座いますから、必ず最後の總攻撃を遣つて詣るに違ひない、何でも此最後の大攻撃を用心せねばならぬと云ふので、今迄こそ残り少ない銃丸を惜んで、思ふ存分打たなかつたのですが、十日過ぎからは何でも構はず、敵の方から打ちかけると見たら、思ふ存分打ち拂ふと云ふ事に極めて、充分用意を嚴重に致して居ますと、十二十三の兩日になつて、我日本の方面は左程でも御座いませんで爲たが、敵は大舉英吉利公使館の方面に向つて、籠城中未曾有の大攻撃を加へたので御座います。併し其前に鳥渡休戦中の事を少し申上げて置きましよう。

北京籠城中の休戦は七月十八日から始まつて、八月十二日迄殆んど四週間で御座いまして、此休戦がなかつたならば、假令救援軍が十四日



北京に到着しても、籠城者一同の存命は覺束なかつたのであらふと思はれます、其所で此休戦中の四週間は陸戦隊も義勇兵も氣樂な歩哨に立つ外は、是と云ふ仕事のない所から、種々の風流無邪氣な慰みがあつたのです。

或月明の晩に、横笛と尺八と手風琴の合奏の音が聴えますから、義勇隊の人々が怪しんで、笛の音を乘に辿つて往きますと、兩三人の水兵が、敵陣に打碎かれた牆壁の上にアグラをかいて、寝て過すも惜しい明月だから、敵前で月見の合奏をやつて居るのだと打ち興じて居ます、此手風琴は中川軍醫の室から持ち出し、笛と尺八は何處からか竹片を拾ひ出して、自分で製造したのです、眞實に水兵程多藝多能の吞氣連中が揃つて居る者は御座いません。夫から又或日一人の水兵が、歩哨に立つて前方を監視して居ながら、

其側の銃眼の上に壊れた鉢を置いてさも、樂しげに時々其中を覗いて居ますから彼奴何をあんなに樂しそうに覗いて居るかと、他の水兵が壊れた鉢の中を見ますと、此水兵の樂しんで居るのも無理はない、鉢の中には可愛らしい二三尾の錦魚が、アツブ〜遣つて居ます是は親王府から見付け出して來たのです。

中川軍醫は朝貌が好きで、種々の種子を北京に取寄せまして、公使館の庭に種子を蒔いてあつたのが、モウ蓄を持つ頃に戦争となつて、主人の軍醫は負傷者の治療に忙しいものですから、朝貌などの事を想出す暇は御座いませんでした、所が休戦中に或水兵が、方々から鉢を拾ひ集めて詣つて、今を盛りと咲き匂ふ朝貌を移し植ゑ、幾つとなく親王府の中に並べて、一同の賞翫に供へましたので、中川軍醫は殊の外感じられました。



朝貌のまだ枯れもせず二三輪。

五一

草薙水兵重傷を負て猶片手の軽業を試み

負傷者治療の中川軍醫最後の負傷を受く

七月十一日から銃丸を惜まず、ドン／＼打つ事になりましたから、義勇兵は皆面白がつて威勢好く打つたので、暫くの間敵の銃眼を滅茶／＼に打流した所などが出来ました、午後になつて以太利の方面で、石油の罐を叩いて大騒ぎに騒いだものですから、敵は其勢ひに辟易したから此日は少しも打出しませんでした。十二日の午後になつて、敵は喇叭を吹きながら、ソロ／＼最後の攻撃を始めて詣りました、モウ援兵の到着が今日か明日かと思ひ居るので以太利兵が石油の罐を叩くと、澳大利兵が家根のトタン板をはが

して騒ぐ、日本兵は壁一重の此方でワンバ／＼と悪口を爲る、支那語に巧みな林君が、『モウ援兵が来るから、貴様達早く逃ろ』と怒鳴ります、彼奴等は全く林君を支那人だと思ひ詰めて居る。『貴様は中国人の癖に洋鬼の加擔を爲る、不埒な奴だ出て来い出て来い』

丸で小供の喧嘩の様な事を遣つて居ましたが、次第に夜が更けますに従ひ、敵は益々増加して、盛んに攻撃して詣りましたから、兼ての覺悟に勇氣百倍致して居ました偵察の味方も、少しは此激烈の攻撃に堪へ兼ねまして、敵は愈々最後の總攻撃を遣る積りだから、此勢ひで遣られると到底助からぬかも知れぬと思ひましたものか、義勇兵の松本幸八君が虎の子の様に秘藏致して居りました、五六本の巻煙草をサラケ出して。



『サア皆喫めサア皆喫め』  
と隠して居た煙草を惜氣もなく喫まして仕舞つた程ですが、十三日の  
午前三時頃から静かになつて味方は一人も負傷致しませんでした。  
所が十三日の午後七時頃から、英吉利公使館の方に猛烈なる射撃の音  
が聴えましましたので、降りしきる大雨にも係らず、總ての歩哨を配置に  
就け、喇叭手に進撃の譜を吹かし、一同揃つて聲許りの突貫を遣つた  
ので、敵は此虚聲に恐れられたものか、時々射撃する許りで、格別の攻撃  
は御座りませんでした。

其中に十四日の午前二時頃ともなりますと、東方遙かに野砲の音が聴  
えましましたので、サア援軍だモウ確かだ一同が勇み立つて、早く親王  
府内の一番高い樹に、日の丸の旗を揚げろと云ふので、義勇兵の木村  
徳次郎君と、此月の三日に満面の砲創が治つた許りの草薙水兵とが、

此樹の上に攀ぢ登つた木村君は早や上に登つて、綱を枝に縛つて居る  
と、草薙君は兩手に其綱を手繰つて、中程迄登つて往きました。時、  
一發の敵丸が草薙君の左の腕を打ち抜きました。偵がに元氣な水兵  
です、左の腕を打たれながら右の手一つで綱を傳ひ、下迄無事に下り  
綱を放すと其儘眩暈の爲に其所に打ち斃れました。

其所で中川軍醫が草薙君を繃帯して、再び聯合病院に送りましたが、  
此繃帯が濟みましてから、中川軍醫と山方看護手と岡田兵曹が三人並  
んで椅子に腰かけ援兵の噂を爲て居ますと、思ひ掛なく一發の敵丸が  
ブスと來たと思ふと、中川軍醫がアイタと叫んで、兩手で右の膝頭の  
所を押へました、是を見た岡田兵曹と山方看護手が側から。

『如何です遣られましたか』  
『イヤ遣られたのぢやあるまい、此所を少しかすつたのだらう』



「事に依ると遣られたかも知れませんぜ」

「イヤ遣られたのぢやあるまい、何だか痛いとは思つたが……」

「そりや遣られたのでしよう、一つズボンを脱いで御覽なさい」

中川軍醫がズボンを脱いで見ますと、立派な貫通銃創ですから、山方看

護手が是を繙帯して、聯合病院に送らうとすると。

「此位の傷だから直ぐ治るだらふ、此所で治療しよう」

と云はれたのですが、此時柴中佐も見舞に來られて。

「モウ援軍も到着した事ですから、如何ぞ心置なく入院して、充分に

治療して下さい」

と勧めたので直様聯合病院に送ります、後は東方の砲撃が次第に増す

と同時に、親王府の銃聲は次第に衰へ、午後二時頃になつて平野守信

君が満面輝き渡つた顔を爲て援兵！援兵！と印度兵の到着を知らしま

したので、二三發敵の銃眼を打つて見たが、是に應じるものがない、  
其所でモウ逃げて居ないのだらうと川上季三君が銃眼の上に登つて見

ますと、敵は居ないから両手を廣げて。

「敵は居ないから出て來い出て來い」

と聲を枯らして怒鳴り立てたので、義勇兵も陸戦隊も我れ勝ちに墻壁

の上に登つて見ると、敵は最早や逃げて仕舞つて、二ヶ月間狭い防禦

區域に閉ぢ籠つて居たものが、急に廣い世界を覗く事が出來たも

のだから、氣も心も心のびくとして愉快で愉快で堪らない、覺えす識

らず天地に轟く萬歳の聲が、調子を揃えて一同の口から迸つたので

御座います。



五二

川上和尙西公使の大膽不敵に驚き  
列國男女狂喜印度兵を歓迎する事

誰にでも好かれて居た川上和尙は、又至極西公使の氣に入りで御座いました、和尙は英吉利公使館で、炭や薪の委員に撰まれました、二十一臺の車に積んで、數十俵の炭を分捕り致しましたので、英吉利公使から御苦勞です、御苦勞ですと二度云はれたのが、ヒドク御自慢で御座いますけれども、格別戦闘や分捕の方にはお人柄、直接の關係の薄い方で御座いまして、始終病人の見舞や英語の通辯で忙しい方でした、暇さへあれば西公使の所に往つて、角砂糖を二つ貰つてお茶一杯を御馳走になるのが、川上和尙籠城中の最大快樂で御座いました。其お茶も角砂糖もトウから盡きて仕舞つて、和尙の樂みはモウ御座い

ませんが、夫でも八月十三日の夜は、川上和尙が西公使の室に往かねばならぬ事になりました、夫は英吉利公使館の四方から攻め寄せた敵が攻撃が烈しいので、日本婦人の身の上が氣遣しくなりましたから、如何したら好からふと公使に相談に詣つたのです、處が籠城中何時も獨りで、戦闘線をブラリ〜と見廻つて居られた西公使は、例に依つて例の通り至極平氣な顔で椅子に掛つて葉巻をスバ〜吹かして居れます。

『如何で御座いませうか、格別氣遣では御座いますまいでしやうか』

川上和尙が心配そうに公使の顔を見上げますと、公使は葉巻の煙をス

トツと一吹ひ喚込んで。  
『私は晝寝したから今夜寝なくても宜しい、貴下方は早く寝かすが好



い

『併し危なくは御坐いますまいか』

『ナアニ危なくはない、危なくなれば私が起して上げるから、皆安心して寝るが好い』

此一言で川上和尙は、西公使の膽力の据つて居るに感服致しまして、我室に歸つて寝ようと致しましたが、如何して如何してナカ／＼容易に寢付かれませんか、其筈で御座いませう、敵は十二日の午後五時から重に英吉利公使館を攻撃して、徹夜の大激戦が御座いました上に、再び十三日の午後十時頃より猛烈なる最後の大攻撃を始めまして、特に此夜は雷雨晦冥の夜で御座いましたから、英國公使館内の各國男女は一人として眠つたものは御座いませんでした。所が翌十四日の午前二時頃とも覺しき頃に、東便門と朝陽門との中間

に當つて居ます、觀泉臺の邊に當つて、カットリング速射砲並に野砲の音が聽えまして、敵の攻撃が次第／＼に緩んで詣り、十時頃になりますと、朝陽門の方向に百雷の轟く様な砲撃暫しも止む時なく、愈々援兵の到着したに相違ないと、英吉利公使館内では晝飯もろくに、食はずに騒いで居ますと、午後の二時頃になりまして、黄色の軍服を着て、頭に布片を巻付けた、眞黒の印度兵が二十人許り、始終密使を出して居た例の玉河の水門から這入つて詣りましたので、各國の男女は殆んど狂せん許りに打ち喜びまして、印度兵の鐵砲持つ手も手切れん許りに、列國の男女から喜びの握手を受けましたので御座います。

五三

天津の幽靈隊北京の幽靈隊を歓迎し

〇〇新〇の〇〇員三千兩分捕りの事



八月十四日の午後八時頃になりまして、福島少将が二大隊許りの日本兵を率ひて、日本公使館に到着した時の、日本籠城者一同の喜びは、到底筆紙の盡す可き所ではなく、何に譬へん様も御座いません、嬉し涙を以て見舞ひ嬉し涙を以て迎えましたので御座います。

此籠城中に戦死致しました前後八人の新佛は、皆其屍骸を假埋葬地から堀出して、川上和尙の讀經と共に茶毘一片の火葬に付し、其遺髪と前齒二枚宛を遺骨として、義勇隊の歸朝と共に、本國に送還されたのですが、中にも最も憐れなのは杉山書記生と高田水兵で御座います。

杉山書記生の屍骸は、タイムス記者モリソン君の通知に依り、總理衙門通譯官唐家樅、川上和尙、野口留學生の此三人が、屍骸檢分として左安門外に出張致し、唐家樅は其棺、川上和尙は其顔、野口留學生は其毛布を夫れ々々實檢致しました所、最早や顔の肉は朽ちて、

髪や髯が鬚付でへバツタ様になつて居たが、是は杉山書記生に相違ないと判定されて、直ちに火葬にされました、獨り高田水兵許り其紀念の寫真を取返したのみで、屍骸の敵に奪はれたは残念な事で御座います。

講談者は北京滯在中義勇隊並に陸戦隊と共に寢食し、又義勇隊と共に歸朝致したのですが、天津の領事館員一同は盛んに北京の義勇隊を歓迎致しまして、民政廳の青木中佐が、北京の幽霊諸君を歓迎致しますと演説したので、天津の幽霊隊が北京の幽霊隊を歓迎すると云ふ大騒ぎになつて、非常に盛んな大宴會で御座いました。

北京の籠城者一同が重圍の裡より救援せられて、列國の將官が共に祝宴を張りました時、英吉利の公使が演説を致しまして、北京籠城中日本の陸戦隊と義勇隊の功勞を大に賞賛致しましたが、是は全くお世



辭では御座いませんので、北京籠城中の日本人は、此千古未曾有の大  
 珍事(ちんじ)に際會(さいくわい)して、世界列國兵(せかいれつこくへい)中至大(ちゅうしだい)に名譽(めいよ)を擔(た)ふて居(ゐ)るのですが、惜(おし)  
 事(こと)には此至大(こゝしだい)の名譽(めいよ)を損(そん)ずる様な一(ひと)の秘密(ひみつ)が義勇兵(ぎゆうへい)の内(うち)に在(あ)つたので  
 す。夫(それ)は他(ほか)では御座(ござ)いません、北京(ペキン)の陷落(かんらく)致(いた)しましてから、或(ある)義勇兵(ぎゆうへい)が日  
 本の兵(へい)を案内(あんない)して、二百五十余萬兩(にひゃくごじゅうごばんりょう)の貯藏(ちよさう)してあつた、戸部(こぶ)に嚮導(きやうどう)し  
 て往(い)つた迄(まで)は好(よ)かつたが、其歸途(そのかへりみち)に二人(にん)の支那人(しなじん)が小(こ)さな包(つ)みを擔(た)つ  
 て、さも重(おも)くしそ(そ)うに汗(あせ)をダラ／＼流(なが)しつゝ、遣(や)つて詣(まゐ)つたので、此  
 包(つ)みが百兩(ひゃくりょう)の銀塊(ぎんくわい)十箇宛(じゅうかんだん)を三(さん)包(つ)み、即(すなは)ち三千兩(さんせんりょう)であること云(い)ふ事(こと)が露(あ)け  
 て、三千兩(さんせんりょう)分捕(ぶんぷ)の主人(しゆじん)は、〇〇新(しん)〇〇員(げん)たる〇〇〇の兩(りょう)君(きみ)である  
 と云(い)ふ噂(うわさ)が流布(りゅうぷ)致(いた)しましたから、愈(い)々(い)一同(どう)が籠城(ろうじやう)の愁眉(しゅうび)を開(ひら)きまして  
 から、西公使(せいこうし)が〇

「昨日(きのう)からは一つも好(よ)い事(こと)が耳(みみ)に入(はい)らない」  
 と嘆息(たんそく)致(いた)されたさうで御座(ござ)います、野口留學生(のぐちりゅうがくせい)が親王府(しんわうふ)から古文(こぶん)の石  
 摺(すり)を取(と)出したのを見(み)てさへ、嚴(げん)しく是(これ)を戒(いま)しめられた柴君(しばくん)の下(もと)にあつ  
 て、親王府(しんわうふ)から價値(あたい)の知(し)れぬ寶物(ほうぶつ)を掠(かす)め出した上(うへ)に、白晝(はくちゆう)公然(こうぜん)三千兩(さんせんりょう)  
 を盗(ぬす)み出したと云(い)ふ様な噂(うわさ)が事實(じじつ)であるならば、義勇隊(ぎゆうたい)否(いな)籠城(ろうじやう)日本(にっぽん)人(じん)  
 一同(どう)の爲(ため)に實(じつ)に嘆(なげ)かしい事(こと)で御座(ござ)います、斯(こ)う云(い)ふ事(こと)は餘(あま)り申(ま)上げ  
 ますと、折角(せつかく)の籠城(ろうじやう)美談(びだん)北京(ペキン)の榮譽(はまれ)が、籠城(ろうじやう)醜談(しゆうだん)北京(ペキン)の不名譽(ふめいよ)になつ  
 ては相濟(あひす)みませぬから、兎(と)に角(かく)北京(ペキン)も陷落(かんらく)し、籠城(ろうじやう)者(しや)一同(どう)が萬死(ばんし)の虎  
 口(こう)を救(すく)はれた所で、先(まづ)は芽出度(めだて)し芽出度(めだて)し、北清(ペクシヤン)再渡(さいど)從軍(じゆうぐん)紀念(きねん)の此  
 北京籠城(ペキンろうじやう)實際(じじつ)談(だん)を大團圓(たいだんえん)と致(いた)します。

北京籠城 終



明治三十四年一月二十日印刷  
明治三十四年一月廿一日發行

定價金貳拾五錢

著者 水田 榮 雄

發行者 大橋 新太郎

印刷者 石川 金太郎

印刷所 株式會社 英舍

東京市日本橋區本町三丁目

發兌元

博文館

不許複製

全壹冊洋裝袖珍紙數四百餘頁美本

軍事

江見水蔭君作

突貫

小說

文界の勇將江見水蔭氏、軍事小説壇に突貫して此編を成す。清國擾亂し列邦争うて兵を出すや、我軍常に先登に立ちて連戦連勝、向ふ處敵無し。突貫又突貫、終に北京に城を抜く。其勇壯なる將卒の活動を、著者が得意の短篇に描出して、筆肉躍る。近快文字、以後世に傳ふるに足來稀に見る。愛國の熱血を絞りたる全國諸俳士百首あり。偉觀なり。

正價金三拾錢

郵稅六錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館



尾上新兵衛君著

軍事小説

戰

塵

全壹冊洋裝袖珍  
紙數三百六十頁美本  
正價金三十錢  
郵稅六錢

本書目次

(第一) 攻撃前の曙(第二) 野營の雨(第三) 敵の屍(第四) 船中の淨瑠璃(第五) 臺灣熱(第六) 諸がゆ(第七) 滯陣(第八) 生命の水(第九) 敵前上陸(第十) 戰鬥の興味(第十一) 萬歳の聲(附録) 我が聯隊 ○屯營の元旦 ○步哨 ○新兵 ○新兵掛 ○陸軍の學校 ○富士艦案内記 ○濤聲日記(以上)

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

江見水蔭君著

小説

戀

短篇

全一冊洋裝袖珍紙數四百餘頁  
正價金三十錢(版五)郵稅六錢

戀愛小説

家としての江見水蔭氏が戀小説數十種を合せて一卷とし、附録としては、氏が得意の詩篇數十種を添へたるが、艶は固より艶なりと雖も、濃を避けて淡、俗を捨て、雅、情緒の纏綿は春山の薄霞、靄々の内に猶認む可きは戀の本牀

神聖にして毫も卑猥なる文は戀なる字を狭まらず、されば戀する人も戀せざる人も董咲く野邊、花散る山路、又は名香薫する閑室に、最愛の友として、

閑讀あらんを乞ふ、

博文館

東京市日本橋區本町三丁目

發兌元



著 君 蔭 水 見 江

說 小

星

篇 短

頁十八百六數紙珍袖裝洋冊一全  
錢八稅郵 錢十五金價正

天界の星 は或る意味にて數の無人

爲の星 は江見水蔭氏が思想の 卷中

脚本あり短篇あり時代物あり滑稽物あり冒險

談あり訪問録あり **材料の豊富**なる實

の星も管 **日月**の如き大傑作、或 **北斗**

星の如く文海航行者の指點とならむは決し  
て誇大の言にあらざるなり

著 人 山 漣 谷 巖



《版 再》

全壹冊洋裝袖珍  
紙數五百五十頁  
正價金四拾錢  
郵稅金八錢  
(寫眞) 拈華微笑、笑顏、  
口繪 山笑、花笑

この書 **笑** とい **思出** し **笑** の罪深き **世辭笑** の追従も  
題して **笑** ふも **時平** が **七笑** の悪しきもせず

**虎溪三笑** の禪味もなければ **馬鹿笑** に過ぎぬど、若 **冷**

**ニタ** く **笑** ひ、一人 **馬鹿笑** し夫れ世間の **冷**

**笑** にあひなば、 **苦笑** どもなるべし兎角は **笑** ひたまへ讀み

やがて作者の **苦笑** 福の神呼出しの咒 **笑** 給へと申す。

館 文 博

區橋本日京東  
目丁三町本

元 兌 發

館 文 博

區橋本日京東  
目丁三町本

元 兌 發



巖谷漣山人著

# 女波男波

全壹冊洋裝袖珍  
正價金四拾五錢  
郵稅八錢

小説の艶に過ぐるを斥く勿れ、個中大寓意あり大諷刺あり、論説の罵に失するを咎むる勿れ。這裡大抱負あり大見識あり、若し夫れ附録の變女大學に至りては變生男子が大氣炎、太の男も三舍を避くべき、蓋し當代の大問題たるべし。嗚呼大なる哉此書や、實は寸珍の美本とす。

發兌元

東京本町三丁目

博

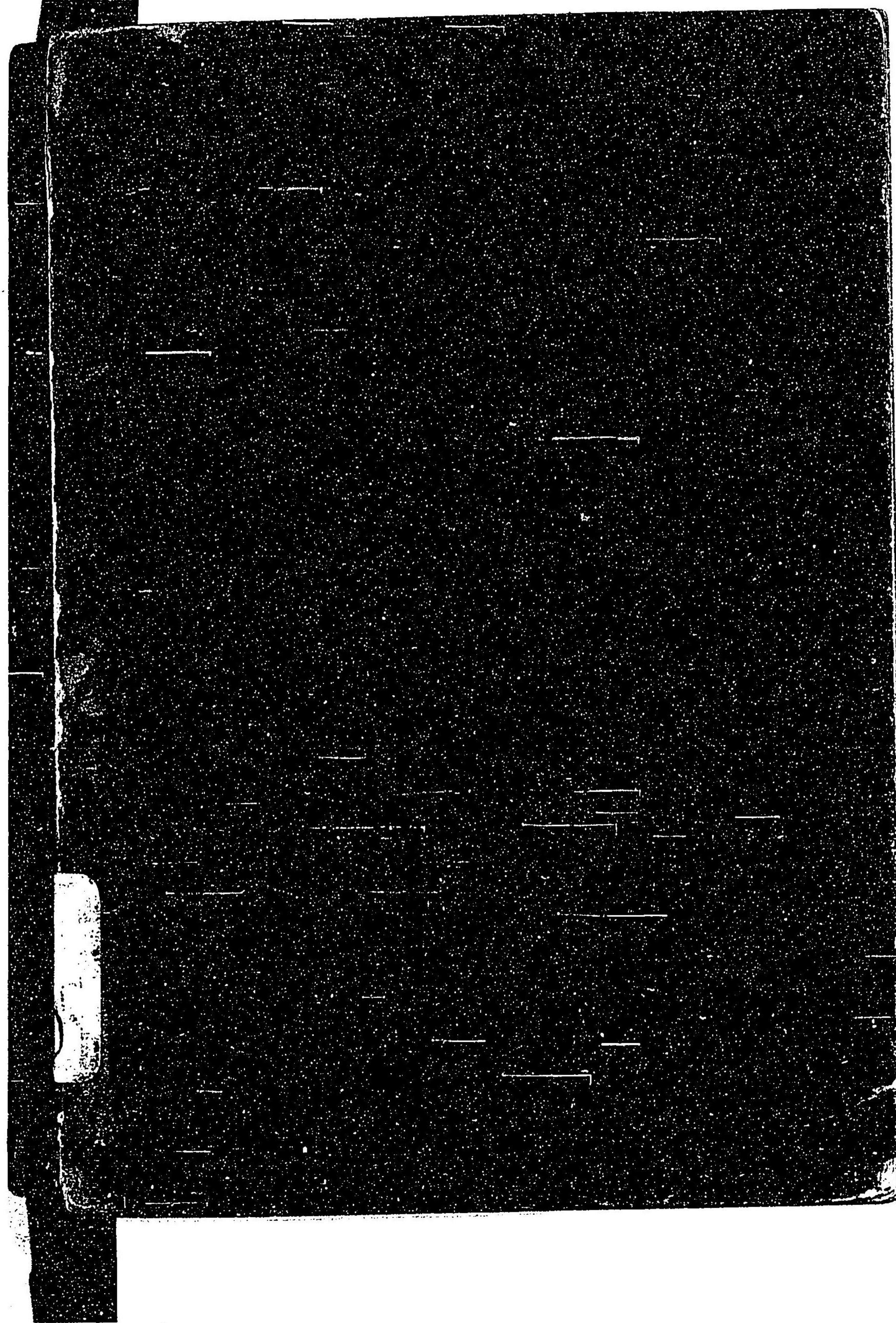
文

館



29
220







002919-000-6

29-220

北京籠城

永田 栄雄/著

M34

ACB-6492





